東医大誌　**70**(3)：294-327, 2012

医　学　史

高橋琢也と学生達（疾風怒濤の物語）(6)

友　田　燁　夫
Akio TOMODA

東京医科大学生化学講座

【要約】　東京医学専門学校は文部省により大正 7 年 4 月 11 日に認可された。学生達は 4 月 13 日には学友会を設立し、文芸・学術活動やクラブ活動を活発化することにより充実した学生生活を構築することを目指した。大正 8 年からは学友会雑誌を発行し、この雑誌を中核として学生および教職員との意思疎通を図った。一方、卒業生達は東京医学専門学校学士会会報を出版した。のちに学友会雑誌と東京医学専門学校学士会会報は合併されて東京医学専門学校雑誌（大正 13 年）となったが、さらに東医校友会雑誌へと改名され（大正 15 年）、戦後には現在の東京医科大学雑誌へと発展した。学生達の最大の目標は文部省による医師免許の無試験開業資格（いわゆる指定校）の認定であったが、それには学校施設の充実が喫緊の課題となった。大正 7 年に卒業を留保した指導的立場の学生達は設備の充実を求めて高橋琢也に迫ったことから、高橋琢也の募金活動は前にも増して拍車をかけていった。ところが学生達が総退学した日本医学専門学校に指定校の認可が文部省より先に与えられたことから（大正 8 年 9 月）、これらの学生達の高橋琢也に対する突き上げは以前にも増して激しくなった。大正 9 年 4 月 13 日に東京医学専門学校へ指定校の認可がおりて彼らの目標は成就した。しかし、大正 12 年に日本医学専門学校は文部省に対して大学への昇格の申請を行なったことから、学生達は東京医学専門学校の大学への昇格を目指す運動を始めた。高橋琢也は大正 8 年には貴族院議員となって、中橋徳五郎文部大臣と入魂の間柄であったことから、東京医学専門学校の大学への昇格には有利であったが、大学への昇格に対して高橋琢也は反対の立場を貫いた。昭和時代に入ると学校の設備は充実し学生生活も安定し、東京医学専門学校は黄金時代を迎えてきた。昭和 3 年 3 月に東大久保敷地内で火災が起り、基礎医学教室の木造建物は焼失したが、学生達の募金により新しい鉄筋校舎が翌年昭和 4 年に建設された。昭和初期からの学校生活の充実ぶりは卒業アルバムから推測できる。昭和 10 年 1 月 19 日に高橋琢也は逝去し、全職員・全学生の手で葬儀が盛大に営まれた。学生達や卒業生達は高橋琢也の残した「仁愛と誠実」の精神を東京医学専門学校に継続するべく、決意を新たにした。本稿では、大正 7 年 4 月 11 日以降、昭和 10 年の高橋琢也の逝去に至るまでの高橋琢也と学生達の交流を中心に記述する。

目次

1.　東京医学専門学校設立後の学生達の日常的活動
2.　医師免許の無試験資格獲得（いわゆる指定校認可）への道
3.　学生達の大学昇格運動と高橋琢也
4.　校歌「ヒポクラテス」の謎
5.　高橋琢也の募金活動

平成 24 年 2 月 28 日受付、平成 24 年 3 月 19 日受理
（別刷請求先：〒 160-8402　東京都新宿区新宿 6-1-1　東京医科大学生化学講座　友田　燁夫）

6. 東京医学専門学校の黄金時代
7. おわりに

1. 東京医学専門学校設立後の学生達の日常的活動

大正 7 年 4 月 11 日に文部省より東京医学専門学校の設立認可の内定が伝えられ、翌 12 日にその認可証（日付は大正 7 年 4 月 11 日となっている）が正式に学校に届けられた[1,2]。それ故、当初は 4 月 12 日が開校記念日とされた[3]［註：大正 9 年 4 月 13 日に医師免許無試験「指定校」の認可がおりたことで、どこかの時点で開学記念日は 4 月 13 日に変更された模様であり現在に至っている］。4 月 13 日に学生達は校友会大会を開き、全員一致で高橋琢也の銅像を建立することを決め、5 年後の大正 11 年にそれを完成する予定で募金の開始を決定した。

高橋琢也は寧日なく設備拡充への募金活動を関西や関東で繰りひろげたが、東京医学専門学校の学生達は東大久保の新天地で医学の勉学に集中していった。大正 7 年 5 月 21 日には東大久保の敷地内に新築された講堂で初めての入学式が行なわれた。この年には新規の入学生はいなかった。この入学式は大正 5 年に（私立）日本医学専門学校に入学し総退学した 120 名の第一学年の学生達のために改めて行なわれた。式典では佐藤達次郎校長が教育勅語を朗読したのち、高橋琢也が理事長（当時は総理ともいった）として訓示を述べた[3]。

この年には変則的ながら 7 月 28 日に東京医学専門学校の第一回の卒業式が行われた。大正 8 年 1 月に発行された校友会雑誌[3] には外国人 6 名を含む 84 名の卒業生の名前が列記されている。彼らは日本医学専門学校を総退学した学生のうち、最高学年の四年生と旧四年生といわれる学生達であった。しかしながら、実際に卒業したのは 84 名のうち 29 名の学生であり、残りの 55 名の学生は卒業を留保し、医師国家試験を受けることなく、文部省より医師免許の無試験資格の「指定校」の認可が来るまで待機する道を選んだ（翌年の大正 8 年の卒業生は 19 名であり、この年も卒業留保者が多く出た）。東京医学専門学校の設立に関わった本部会[4] 委員の学生で卒業資格があった 9 人のうち、大正 7 年に卒業を選んだのは中本富太郎、安部達人、青山豪一の 3 名であり、後藤哲雄、小川東洋、古川道之助、中村丈夫、川目鉄太郎、難波静雄らは卒業を留保し、文部省より「指定校」の認可がおりた大正 9 年に正式に卒業した[5]。学生達の記録「奮闘の半年」[6] にもしばしば名前が出てくる旧四年生の佐々一雄、松岡信篤、上村透らは大正 7 年に卒業の道を選んだが、三輪新一、上野賢太郎、筑紫哲路、小谷無違、須藤力三、鈴木達夫、嘉陽宗正、杉山泰治、丸山郁夫らは指定を待って卒業を留保した。

この日の卒業式では佐藤達次郎校長（**写真 1**）の挨拶に続いて、順天堂医院第三代当主・佐藤進が挨拶に立っている。佐藤進は大正 5 年 6 月に学生達が訪問して以来、終始学生達を支援し、東京医学講習所の立ち上げ（大正 5 年 9 月 11 日）には顧問として関与していた。佐藤進は大正 9 年卒業の学生達に「芳流」（**写真 2**）という書を与えている。しかしながら、高橋琢也は関西への募金活動のためこの日、出席は出来なかった。これについて卒業生の一部が（恐らく卒業を留保した学生達）が不満をもらし、

写真 1　佐藤達次郎（1868～1959）

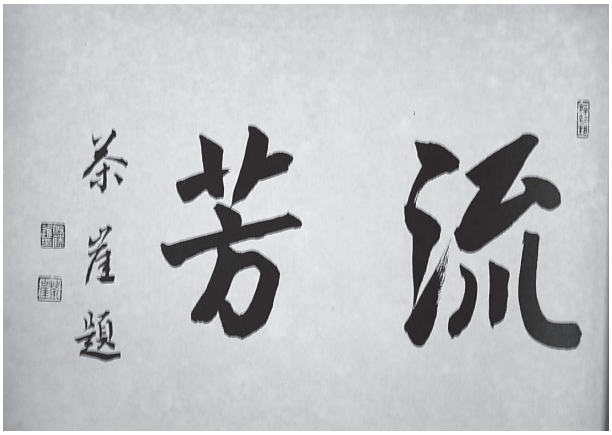


写真 2　佐藤進（茶崖）書「芳流」: 茶崖とは順天堂医院のある「御茶の水」の崖の意であり、佐藤進の雅号であった。

帰京した高橋琢也がそれを仄聞したことから、高橋琢也は雑誌「国論」[7] に「微意あり」と声明文を掲載した（第二章に詳述）。

学生達は東京医学専門学校が認可されてからは理想の学園を作ることを目ざした。早速、野球交流や詩文会のクラブ活動が再開されている。大正 7 年 4 月 13 日に「校友会」が設立されたが、大正 8 年からは校友会雑誌が年に一度発行されていった[3,5]。「校友会」とは学生達の自治および親睦の会であり、自分たちの自治により学生生活の質を高めていくという理念が既に形成されていた。学生達のモットーは当時より「正義」「友愛」「奉仕」であった。これは今でも東京医科大学の校是となっている。「自主自学」というもう一つの校是は学生達が東京医学専門学校の大学昇格を目指した昭和初期に、佐藤達次郎校長はむしろ日本一の医学専門学校を目指し、東医のスピリットは「自主独立であり質実剛健である」としたことから派生したようである（馬詰嘉吉・大正 9 年卒業、花輪音三・昭和 8 年卒業、談）[8]。昭和 11 年に発刊された東医校友会雑誌[9] の中で清水茂松教頭が「我校校歌の　―　威を官学の名に借らず、ただ之力　―　益自主自学主義に則り、自由と希望に満てる私学東医学園の発展を期すべきなり」と述べていることから考えて、「自主自学」の校是はこの時期に確立されたものであろう。

大正 7 年 9 月 21 日には校友会の発会式が行われた[3]。この式典では寺尾亨理事、福本日南、大角桂厳理事、田沢鐐次、池上作二らの教員らが次々と挨拶に立った。寺尾亨や福本日南らは孫文による辛亥革命の支援で有名な方々であり、学生達の精神的支柱となっていた。この年の 10 月 17 日には在校生が主催して第一回卒業生の送別会を行なった。高橋琢也は募金活動のため関西に出張していて、この時も学生代表が高橋の祝辞を代読した。高橋琢也の欠席は翌年（4 月 27 日）の第一回、第二回卒業生の合同卒業謝恩会でのトラブルの伏線となった（第二章に詳述）。

一方では、学生達は文芸部を中心として学校の徽章と校歌の募集を開始した。徽章はすぐに決まり、現在の東京医科大学の校章として残されている。校旗にも校章が入れられた。しかしながら、学生達の校歌への応募は少なく、応募のあった作品も校歌として採用されなかった。応募された校歌は校友会雑誌第一号[3] と第二号[10] に掲載されている。この時期の文芸部長は小宮豊隆（ドイツ語教授）[11] であり、小宮を中心に校歌の採用を検討していた。小宮豊隆は有名な夏目漱石門下生であり、大正 5 年より 11 年 3 月まで東京医学専門学校でドイツ語の教鞭をとっていたが、4 月より法政大学教授となり、大正 12 年からのヨーロッパ留学を経て、大正 13 年に東北帝大・法学部教授（ドイツ文学）として仙台に赴任した。小宮は仙台在住の土井晩翠とは夏目漱石をとおして旧知の間柄であったことから土井晩翠に校歌の依頼が出来る立場にあったが、そのような記録は残っていない。東京医学専門学校において土井晩翠の校歌「ヒポクラテス」の原稿が発見されたのは大正 12 年 4 月頃であり、この時すでに小宮は東京医学専門学校には在籍せず、ヨーロッパ留学の最中であった（第四章）。

校友会雑誌第一号[3] には学生達の日常的な課外活動の様子が描かれてある。文芸活動としては多くの学生達が短歌や俳句を校友会雑誌に寄稿している。投稿者が多くて掲載がままならなかったことが、編集後記に出ている。大正 7 年に第三学年の学生であった馬詰嘉吉は「山の気の迫れる庭にさす月のかげにも咲ける菊を見し哉」、原三郎は「ほととぎす啼く雪渓の向う方白樺の幹並みてさみしも」という力作の短歌を寄せた。本格的な運動部の設立は大正 8 年以降となるが、大正 7 年には学年対抗の野球やテニスの試合が行なわれている。さらに学生達は会計部を設立した。会計部はクラブ活動や校友会活動のための資金を学生達から集め、それを管理していたが、高橋琢也の寿像建立のための募金や、大学への昇格のための募金の管理も行なっていたと考えら

れる。のちに、この会計部の文箱から校歌「ヒポクラテス」の原稿が発見されたのである。大正 9 年の校友会雑誌[5] には安部達人、市川照、杉山泰治らが応募した校歌が載せられてある。

校歌　　安部路人

(1)　惜しくも暮るる春の日の　光に集う若人よ
胸の懐いも大久保の　野辺に佇み越し方の
奇しき運命に見かえれば　今はなつかしわが母校

(2)　路ゆく人の足をとめ　わが世の旅に倦めるとき
涙に滲む血判の　文に連ねし丈夫の
四百に余る数々を　高くかかげて告よかし

(3)　時は暫しもとどまらず　文化の巷血に染みて
二千年の夢さむみ　欧州の民憂いあり
平和の使途は東方の　黎明の光に目醒めたり

(4)　ああ杏林の人となり　生きて甲斐ある現世に
改造の斧ふりかざし　独力立てし堅城の
聖き城砦に師と弟の　陶冶の叫び声たかし

(5)　人若し問わばわが城は　愛と正義の旗高く
血潮に燃ゆる情誼あり　剣に結ぶ義のありて
自由の大空仰ぎつつ　向上の旅遥かなり

杏林曙光　　市川　照

1. 春夏秋冬いや高く　学窓に聳ゆる芙蓉峰　この清英を望みみて　明日の栄光を憧れん
2. 愛の根深きわが母校　過ぎし日のあと眺れば生命の血潮紅に　同胞の脈連ねたり
3. 理想は高く望みみて　懐想を胸に寧めてより友愛清く結び凝り　尽きず正と義二字の韻
4. 健児一団風雲の　園生は朝の香ぞ高き　わが杏林の活大地　ゆかしいかなや東医専
5. 清雲高く大空に　無限の力溢るなり　回生の刀を取り持ちて　仁世の医業われなさん

杉山泰治

一　緑りに薫る杏林の　金星瞬く大久保に　血涙灌ぎ築きたる　精神の砦愛の城
二　都塵を外に芙蓉峰　遠く眺めて吾校は　清新の気と高潔と　希望の光漲りぬ
三　黎明の鐘耽りひびき　自由の天地に飼育まる見よ雛鳥の羽搏きを　無限の力潜むなり

しかしながら、これらの作品は校歌として採用されなかった。その後も校歌の募集活動は継続されたが、最終的に校歌の決定は大正 12 年の校歌「ヒポクラテス」の原稿の発見[12,13] に待つこととなった（第四章）。

大正 8 年に応援団が結団された。この応援団歌として、杉山泰治が校友会雑誌に投稿している[5]。

応援歌（第一回発表）

東医、東医、東医の健児　奮れ、奮れ、奮れ、鮮かに
大久保原頭、鍛えし腕もて　　向う所は　草刈の如くに　　まつわる敵を　薙ぎ倒せ

東医応援歌　其の一

1. 芙蓉の峰の精を受け　　城北大久保原頭に練りに練りたる選手の腕
今日こそ示せいざ奮え　　フレフレフレ東医
2. 大久保の野の春の陽に　　磨き鍛えしこの腕示すは此の時いざ我が選手
起てよ東医のテニス、野球、相撲団　　フレフレフレ東医

大正 9 年初頭には応援団以外にも野球部、相撲部、剣道部、卓球部、庭球部などの運動部が発足している。また、オイテルペー・グルッペ（洋楽演奏部）、尺八部（深山会）、東京医専雑誌編集部などが発足した。大正 10 年までにはさらに、講演部、図書部などが加っている。大正 11 年までに柔道部と庶務部が発足した。

大正 9 年以降、学生達の学術活動はさらに活発になり、その内容は「校友会雑誌」や「東京医学専門学校雑誌」、「東医校友会雑誌」の中に残されている。大正 10 年には佐々一雄が卒業生では初めて医学博士（病理学）を取得し、原三郎（薬理学）は大正 10 年にドイツ・キール大学に留学した。二人とも早い時期に東京医学専門学校の教授となった。校友会雑誌は大正 13 年より東京医学専門学校雑誌と名前を変えた。表紙（**写真 3**）に「東京医学専門学校雑誌」[13] という表記とともにエスペラント語で「Raportoj de La Tokia Medicina Kollegia（Reports of Tokyo Medical College の意）」と併記されており、当時の学生達の意気込みが分かろうというものである。浅田一（法医学教授）がエスペラント語の専門

VOLUMO 7-a　Kajero 2-a　Marto 1925

RAPORTOJ
DE
LA TOKIA MEDICINA KOLEGIO

REDAKCIO KAJ ELDONEJO:
TOKIO-IGAKU-SEMMONGAKKOO
Higaŝi-Ookubo, Tokio

東京醫學專門學校雜誌

第七卷　第貳號

大正十四年三月二十五日發行

目次

◎口繪
◎校歌
◎卷頭の辭
◎論說
「腸チフス」の脈搏と心音……教授　久野修三(一)
宗教と科學との提携……四　籔　雀(五)
產兒制限の一考察……四　山田　博(二)
醫專出と醫大出……四　鈴木順爾(五)
現代生活と佛教……四　皆空庵(七)
自疆術に就いて……三　高橋六彌(三)
◎文藝
感想……創作……翻譯……詞藻……
◎校友會報
校友會役員氏名……部報……會計報告……
◎東京醫專醫學士會報
◎高橋總理銅像建立に關して
◎雜纂
◎編輯餘錄

写真 3　東京医学専門学校雜誌表紙（大正 14 年 3 月 25 日発行）: Raportoj de La Tokia Medicina Kolegio とエスペラント語で書かれてある。

家であったことから、この当時、学生達のエスペラント部も設立されていた。大正 14 年に発刊された東京医学専門学校雜誌第二号[13] に初めて校歌「ヒポクラテス」が発表されたが、この本は当時の学生達の高い学術水準を示している。なお、「東京医学専門学校雜誌」の書名は昭和元年には「東医校友会雜誌」と名前を変えており、当時の専門学校から大学への昇格運動と関連したものと考えられる（第三章に詳述）。

一方、学生達がほとんど退学してしまった（私立）日本医学専門学校では、大正 5 年より大正 7 年にかけて危機的状況を迎えていた。明治 36 年に制定された「専門学校令」では、学校を設立して 2 年を経ると、無試験で医師免許（いわゆる「指定校」の認可）が文部省より得られる規定となっていた。医学専門学校への「指定校」の認可は東京慈恵医学専門学校と熊本医学専門学校の 2 校の医学専門学校には既に与えられていた。（私立）日本医学専門学校は大正元年に設立されたにもかかわらず、大正 5 年 3 月になっても文部省から認可が下りなかった。その理由としては磯部検蔵理事の文部省に対する不用意な発言と、東京帝大医学部学派の人達の反対があったためといわれている。この問題に端を発して大正 5 年 5 月 16 日に多くの学生が退学し、東京医学講習所さらには東京医学専門学校へ移ったので、（私立）日本医学専門学校では学費の回収がままならず、多くの負債をかかえて倒産寸前となってしまった。しかし、中原徳太郎、塩田広重、小此木信六郎らの懸命な努力により、大正 8 年には復活を遂げていった。大正 7 年 8 月には私立日本医学専門学校から日本医学専門学校へと学校名を変えている。この時点で経営者が変わったのである。

大正 5 年 6 月以降、私立日本医学専門学校に残留した学生数は 4 年生 13 名、3 年生 16 名、2 生 14 名、1 年生 12 名の 43 名であった。教師達は 2 年半の間、無給で講義を続けた。出席者が少ないときも講義は欠かさず続けられ、一人の受講者に対して一人の教師が授業を行なうこともあったと「日本医科大学 70 年史」[14] に記載されてある。「日本医科大学 70 年史」にはこの時期の記載は少なく、日本医学専門学校にとって空白の時代であった。大正 6 年 9 月には 126 名の新入生が入学し、大正 7 年には 118 名が入学した。大正 8 年の初めまでに、学校経営は軌道に乗り始めた。大正 8 年 2 月に文部省に医師免許の無試験資格の「指定校」の認定を申請し、その年の 9 月に認可が下りた。この時文部大臣は岡田良平より中橋徳五郎に代わっていた。この頃まで日本医学専門学校の危機が続いていたといえる[14]。その後は日本医学専門学校は急速に復活を遂げ、大正 12 年には大学昇格への申請を文部省に行い、大正 15 年にそれが認可されるに至った。大正 5 年 5 月 16 日以降、日本医学専門学校に残った学生達と教師達が必死で頑張り、最悪の状況を脱したことが記録されている。東京医学専門学校のほうは高橋琢也の獅子奮迅の努力により安定していったが、もう一方の日本医学専門学校は最悪の時期が続いたのである。

大正 11 年の校友会雜誌（4 号）[9] には、東京医学専門学校の医学生と日本医学専門学校の医学生との間の交流試合（剣道や野球）が行われたことが記録されており、両者が和解したことを示している。その後、これら 2 校の学生達はそれまでの経緯を互い

に忘却し、交流を深めるようになっていった。

2. 医師免許の無試験資格獲得（いわゆる指定校認可）への道

大正 7 年 4 月 11 日に文部省によって東京医学専門学校が認可されるとともに、東京医学講習所に学んだ第四学年の学生達や旧四年生（日本医学専門学校で卒業資格をもっていたが、退学の道を選んだ学生達）といわれる学生達は卒業資格を得たが、多くは卒業を留保し当初の目的であった無試験資格の認可が文部省より来るのを待った。この年 7 月に東京医学専門学校を卒業し、医師国家試験を受けたのは 29 名の学生達であった。残りの 55 名の学生達は東京医学専門学校に残留したのである。彼らは東京医学専門学校の建物と財産の充実が「認可」の第一の条件であるとして、高橋琢也に遠慮なしにその要求を出していった。これらの学生達は時として高橋琢也に対して老骨と呼んで迫った。

大正 7 年 7 月 28 日に佐藤達次郎校長のもとで第一回の卒業式が行われた。その前日まで高橋琢也は募金活動のため関西に長期出張し、帰京したばかりであった。高橋は旅の疲れのため、卒業式には出席しなかった。卒業資格をもった学生の一部はこれを問題にし、高橋琢也はそれを耳にしたことから、早速雑誌「国論」[7] に「東京医専卒業生諸氏に告ぐ」（大正 7 年 8 月）という文章を寄せた。

東京医専卒業生諸氏に告ぐ　　東京医学専門学校総理　高橋琢也

諸氏は今回東京医学専門学校の学生として芽出度も第一回に卒業したり。予は諸氏の為めに之を祝し、本校の為めに之を賀す。諸氏の栄誉や大なり。父兄の歓喜亦極りなからん。特殊の事情に依り千辛万苦の末に創立し得たる学校の第一回の卒業たるを思えば、予の快感も亦諸氏父兄に譲らざるを信ず。蓋し諸氏は今回の卒業に付て感慨無量なるものあらん。何ぞや、奮闘半年の肉体的艱難に加うるに、一年有半の精神的苦痛を感じたること多大なるものありしを追懐すればなり。今ま試に其精神的苦痛の予の記憶に存するものを挙げんか。

前東京医学講習所の秋主幹の辞任は其一なり。文部省斡旋の米人予約医科大学設立の中止は其二なり。其筋勧誘の日本医専合併交渉の不調は其三なり。屡々知人有志の前校復帰の説得に苦しめられたるは其四なり。時に同士学友の背信行為に悩まされたるは其五なり。父兄又は保証人の憂慮苦悶を重ねたるは其六なり。学資送金の継続に困難せるものありたるは其七なり。家事係累の関係が永く遊学を許さざるものありしは其八なり。学校敷地の買収容易に運ばざりしは其九なり。学校設立の進行を官憲に障害せられたること其十なり。建築の着手に土地会社の故障に遇うたること其十一なり。上棟の二校舎とも暴風の為めに全部倒潰したること其十二なり。竣工校舎受渡に紛擾を生じたること其十三なり。危くも敷地買収の破約せられんとせしこと其十四なり。回生病院買入れの交渉に困難ありしこと其十五なり。文部当局の意向容易に医学専門学校を允許せざるの説ありしこと其十六なり。学校資金調達の為め書画骨董の売却に努力したること其十七なり。寄付の新画販売の運動を為したること其十八なり。代議士近藤某の学生徴兵忌避の議会質問の予報に接したること其十九なり。東京日日新聞の学生に対する非国民記事は其二十なり。憲兵屯所の学生総体の検挙は其二十一なり。編入試験に関する当局との難交渉は其二十二なり。尚此外一年有半、講習所時代絶えず東京医学専門学校の創立を妨害したるもの多かりしことも諸氏の能く熟知せる所ならん。否予の聞知せる事項以外にして回想したるとき、其感慨果して如何なりしか。他人の想像し能わざる程のものありしを信ず。

仄に聞く、諸氏は卒業式の当日、予の列席せざりしを遺憾とせしと。予も亦席末を汚す能わざりしを不本意とす。然れども、式典を挙行するには佐藤校長以下教授職員皆之に臨むべきを以て、予の贅瘤にして、末席を汚さざるも支障あることなし。予は只諸氏と肉親に斉しき関係あると、本校の経営者たるとの事由よりして、出来得ることなら列席せんと思いしも、時と事情の之を容るさざりしものありしは遺憾なりき。請う、左に少しく其理由を述べん。

一、東京医学専門学校は認可を得たりと雖も、校舎の営造物過半を欠く。之を築成すること当局の期限付条件あり。

一、附属病院の設備は今尚甚だ不完全にして当局亦之に完備することを責むること極めて急なり。

一、佐藤校長は新入生の始業式に方りて大に校舎の不備なることを告示せられたりと聞く。
一、既に専門学校として認可を得たり。其内容と物質的設備を完成して指定を得べき準備を全うせざるべからざるは自然の理路なり。
一、苟くも医育の改善を図らんとするには校紀及風紀を厳粛にし組織的予教を施すの要あり。而して甲の為には寄宿舎を建築し、乙の為めには予科を設置せざるべからず。
一、今日の附属病院は規模狭小にして、学校の用途を欠くもの甚だ多し。之を完成するには改築増築を要するもの亦少なからず。
一、現在の校舎及び病院の造営又は設備の為め資金を要すること甚だ急にして、其調達に追わるる為め、学校の基本財産の準備を豊富にするの余裕なきも校舎病院の経営を安全にせんとするには維持費を充実せざるべからず。

以上の七項は其責任悉く学校経営者たる予の双肩に懸れり。予は如何にして此責任を果すべきか。今回名古屋、京都、大阪、神戸の四都市に出張して殆んど五十日間の活動を為したるも之が為なり。幸に阪神地方のみにては富豪紳士百余名の協賛を得たるが、もし中途帰京すれば機を逸するの虞れあり。故に卒業式には列席する能わざりき。是れ予が時と事情の容さざりしものありと謂う所以なり。否斯る理由は予が之を弁ぜざるも諸氏の夙に諒知する所なり。而して諸氏も亦本校第一回の卒業生として月桂冠を得たると同時に、一大責を負うたることを自覚したるならん。何ぞや諸氏が二年間の苦節と艱難との外尚其間の言議と行動とは満天下の識者能く知悉し、少くとも諸氏の将来に向って其期待する所多大なるものあるを知ればなり。希くは諸氏の今後の行動に於て充分に其責任を全ふし、以て識者の期待に背くことなららんことを。茲に諸氏の卒業を祝福すると同時に聊か微意のある所を披瀝して諸氏に告ぐ。

大正 7 年 8 月

このような高橋琢也の説明にもかかわらず、一部の卒業生達は納得しなかった。当時の「専門学校法」によると新設の医学専門学校への「指定校」の認可は設立より 2 年を経過しなければならないということになっていたが、高橋琢也は敢えてそれを学生達には伝えていない。高橋琢也がこの論説を雑誌「国論」[7] に発表した背景には、学生達の状況を公開し、文部省に一刻も早く「指定校」の認可を与えるよう促進させたい狙いもあったと考えられる。

大正 8 年 2 月に（私立）日本医学専門学校が文部省に対して指定校の申請を出した。この申請の話は東京医学専門学校の学生達にすぐに伝わったと考えられる。この年の 4 月 27 日の卒業謝恩会（前年度卒業生とこの年の卒業生の合同謝恩会）において、一部の卒業生達および卒業を留保した学生達が高橋琢也に対して次々と学校の設備の充実を訴え始めた。学校の設備と財産の充実が無試験資格認定の獲得に必須であったからである。その時の様子は荒井恒雄（昭和 10 年、東京医学専門学校・内科学教授・寺尾享理事のおい）の高橋琢也への追悼文の文章[15] に克明に描かれてある。

高橋翁追憶　荒井恒雄　（昭和 10 年 10 月 30 日）

高橋翁が我が東京医専の生みの親であることは今更いうまでもないことであるが、今日の基礎をつくらるるまでに如何に苦心せられたかは想像に余りあることである。私は本校が文部省に指定せられた年から教鞭をとることになったのでありますが、当時の状態は今の学生諸君の思いも及ばぬ程で、校舎と病院は先年焼失したあの古い建物 — 麹町にあった明治前期の回生病院を毀して持って来たものと聞いて居ります — 夫に今の生化学教室がやっと出来上がり、もう一つ山林局から払い下の木材で大きな教室をつくりかかったのでしたが、一夜大風一過無惨にも倒壊してしまって荒涼たる光景を呈して居た時代でありました。

翁に就て種々思い出すこともありますが、今も思い出すのは上野精養軒に於ける第一、二回卒業生の謝恩会の光景であります（大正 8 年 4 月 27 日）。第一回生は前年に卒業せられたのでありますが、指定を待って第二回生と同時に卒業式を挙げたわけであります。此第一、二回というのは御承知の通り本校の創設せらるるに至った主動者というべき人々でありますから、単純な医学生ではない、中には私等と同年又は以上の人も居りまして、学問にも熱心であり、世故にも通ぜられた人が多かったから、教壇でも屡々教授連を苦しめる程でした。

さて謝恩会の光景でありますが、開宴間もなく

卒業生の面々一人々々立って慷慨悲憤の演説であります。高橋翁をたよって学校を創設して貰いながら、約の如く設備もしてくれぬというわけで、遂には老骨々々と先生を目のあたり詰問する有様です。之では謝恩でも何でもない、遂には我々の方まで飛ばっちりがくる次第で、我々は這々の態で退却、余りの権幕に其後二三年謝恩会には臨席せぬことを相談した程でした。

所が此時高橋翁は一々立って学校創立の苦心を語られ、必ず約の如く設備を完成し、名誉共に備った専門学校をつくりあげると卓を叩いて疾呼して居られた姿は今も目に浮んで来ます。然も其後十年ならずして、今日の盛大をなすに至ったことを考えますと、一面には翁が其豊かならざる私財を擲ったのみならず、七十に余る老躯を駆って全国を遊説して浄財を集め、本校のために其後半生を捧げられた翁の苦衷を思うと共に、涙を振って、恩人をも痛罵し、翁を鞭撻して、此大事業を完成せしめた第一、第二回卒業生（勿論第三、第四回の卒業生も之にあずかっているわけですが）の母校を思う熟誠に因ること多大なものありと言わざるを得ないのであります。

翁が先年此等卒業生諸君から立派な隠棲の居宅を贈与せられ惜い哉、余生を楽む閑もなく長逝せられましたけれど、本校現在の状態を見れば、翁も地下に微笑せられていることと思います。老骨と罵った卒業生諸君も定めし満足と痛惜の涙を浮べて居られることでしょう。

翁に就ては尚記したいこともありますが、第一回謝恩会の光栄を記して追悼の辞に代えることと致します。

大正 7 年の第一回卒業生の謝恩会はその年に行なわれなかったことから、翌年の春（大正 8 年 4 月 27 日）、上野精養軒において第二回卒業生と合同で謝恩会が行われた。この卒業謝恩会において、出席した学生の一部が学校の充実を高橋琢也に延々と訴え、問い詰めた。当時の学生達には年齢が高く壮士堅気の人達が含まれていて、その追求は激烈であったと考えられる。対する高橋琢也は明治 30 年の森林法制定に至るまで、原敬や中村弥六らと激論をかわし[16)17)]、大正 5 年より 7 年にかけて文部省局長・松浦鎮二郎と対峙してきたこと[2)18-20)] などを考えると、学生達の追求をかわすのは赤子の首をひねるよりもたやすいことであったのであろう。しかし、こと謝恩会に関しては高橋琢也が手塩にかけてきた学生達であっただけに、彼らの追求は身を切られるような、つらい出来事であったと推測される。高橋琢也の日記[18)] には次のように書かれてある。

大正八年四月二十七日　午前十時。龍明館。平塚知事。関根やの森。西村。佐々木旅館。**上野精養軒**。柏会明治絵画会。田中章、池上秀畝。小林呉嬌。来人なし。病院見舞。十円柏会寄付。

四月二十八日　朝より車にて中川友次郎、秋元喜七、周布公平。鮫島武之助、松浦五平、田健次郎、福永吉之助、野村龍太郎、**医学校**。三十五円家賃。長者町より出火。夜横浜大火。昼より出火、夜まで。三千余戸消失、損害五十万。

この日記にあるように、大正 8 年 4 月 27 日に上野精養軒で卒業生謝恩会が行われたと考えられる。翌日の 4 月 28 日、高橋琢也は東京医学専門学校に立寄っている。前日、紛糾した件でもう一度学生達に話しを伝えたのであろう。しかしそこでも高橋琢也と学生達との間には激しいやりとりがあった模様である。高橋琢也日記[18)] には大正 8 年 4 月 29 日と 30 日の通常の記述以外に次のような一節が残されてある。

大正八年四月二十九日、三十日　忘れかぬる口惜しき日なり。汝忘るなかれ。汝忘るなよ、われも又わするる事なし。

高橋琢也は日記の中でこのような感情的な心情を吐露することはほとんどなかった。わずかに秋虎太郎、中濱東一郎、松浦鎮次郎らに対して多少の不満を述べた箇所が日記[18)] の中に散見されるのみである。大正 7 年 3 月から 4 月初めにかけて東京医学専門学校設立に関わる一番困難な時期でおいてすらそうであった。大正 8 年の 4 月 29 日と 30 日の高橋日記[18)] には「**忘れかぬる口惜しき日なり**」についての説明は一言も書かれていない。しかし、4 月 29 日と 30 日の日記の中に夜半に学生達が訪れたことが別途書かれてある。29 日の夜半に医学生達は高橋琢也を訪れたが、そこで激しいやりとりがあったと考えられる。30 日の夜に長委三美、佐多正蔵らの医学生達が夜分に高橋琢也を訪れた。前日の件の

とりなしに訪れたのであろうか。あるいはここでも激しいやりとりがあったのであろうか。「**大正八年四月二十九日、三十日　忘れかぬる口惜しき日なり。汝忘るなかれ。汝忘るなよ、われも又わするる事なし。**」とはこれらの出来事をいっていると推測される。

四月二十九日　曇天。八時より自動車にて後藤（新平）外相、団琢磨、指田葬式、上野停車場、藤原銀次郎、上野松阪や下駄。展覧会望む。夜に至り、医学生。竹下（文隆）、松原（一一事務）。絵画九十六本売代残金入金全部相済み。

三十日　杉山見送り。安△知知事、林知事、太田、川崎、阿部、木田川、渡辺、岡田、力石、新妻、柿沼の十一知事を問う。来人、夜に至り医生佐多（正蔵）、長（委三美）、はじめ四人。

五月三日　朝より天野、吉原、医生二人。

5 月 3 日に医学生二人が高橋琢也を訪れている。そして 5 月 4 日には気持ちが収まらない高橋琢也はとうとう東京医学専門学校において大演説をなしたのである。

五月四日　午前八時より医学校校友会行く。二時間渡る演説なす。来る人、医学生

この時期、疲労が続いて高橋琢也は体調を壊している。6 月 4 日には卒業を留保していた後藤哲雄（旧本部会委員長）が高橋琢也を訪問し、翌日には 2 年生および 3 年生の学生代表が見舞いに訪れた。侘びを兼ねた見舞いであろうか。

六月三日　朝、病院より小便とり来る（松野）。田沢（遼次郎）医師。

四日　学生後藤（哲雄）。松原一一。

五日　学生二年生、三年生代表者見舞に来る。

6 月 8 日からは気を取り直した高橋琢也は活発な募金活動を開始した。田中四郎右衛門（田中四郎右衛門商店店主）、山本達雄（政友会幹事長）、鈴木梅四郎（王子製紙専務）、早川千吉郎（三井合名会社副理事長）、山縣有朋（やまがた　ありとも）、その他大財閥の幹部（久原房之助、団琢磨、有賀長文）を次々と訪問した。夜には卒業生で本部会の学生であった安部達人（路人）が高橋琢也を訪れた。安部達人はかつて学生本部会の一員であったが、前年度に既に卒業していて、近況報告に訪問したのでないかと推測される。

六月八日、九日、十日　朝八時より、二人曳きにて、田中四郎右衛門、鈴木梅四郎、山本達雄、館田延太郎、早川千吉郎、波多野承五郎、山県有朋、加藤正義、久原（房之助）、石塚、山下汽船、三井、団（琢磨）、有賀（長文）、田中文蔵、台南製糖、大正銀行、大川の藤田、政友会本部、原総裁五百円債券買入。勧業銀行（拾円債権買入五十枚）。夕帰宅。来人、村本、天野、富谷。医学士安部達人。

6 月 12 日には陸軍の飛行機演習が行なわれ、貴族院より招待されて参観した。この日の観閲については雑誌「国論」に詳しく書かれてある[21)]。学生達への対応が大変な時期であったが、高橋琢也は陸軍飛行機演習の状況と考察を並でない文章で残しており、さすがである。帰宅後、学生二人が高橋琢也を訪れているが、面会を謝絶している。ここにも 4 月 27 日、28 日の事件が尾を引いていると考えられる。

六月十二日　雨天。朝六時出発。千葉県下志津。陸軍飛行、貴族院招待行く。四時帰宅。来人保田大吉、学生二人面会せず、すぐ返す。竹下半太郎。

その翌日（13 日）や 16 日、18 日にも学生達が高橋琢也を訪れている。

十三日　天気雨天。有吉、医学生三人。天野。

十六日　九時より日比谷、井上氏会葬に行く。政友会本部。夕、帰宅。来人はなし。学生長外一名。

十八日　紀田琢司、医学生。夕五時より△島町偕楽園、佐藤達次郎氏の招待受く。

館田三郎面会断る。

面会を断られた館田三郎の名前は入学生名簿や、卒業生名簿、総退学者名簿にも載っていないので、学生ではないのかもしれない。上記高橋日記の 6 月 8 日から 10 日に記載されている館田延太郎（下線）

の縁者であろうか。高橋琢也は 5 月 19 日に広島県学生会に寄付金を持って広島県人学生会に参加した。この会には長委三美らが入っていたと考えられる。6 月 16 日の長（委三美）の訪問は 6 月 19 日の広島県人会学生会の案内のためであったと考えられる。一方では 6 月 24 日に東京医学専門学校の卒業生達が卒業のお礼に高橋琢也を訪問した。これには高橋琢也もいたく喜んだことであろう。その日の日記[18] には「医学卒業生一団体、新医学士、礼に来る。」と書かれてある。この年にも 19 名の学生のみが卒業した。この時期、高橋琢也はしばしば東京医学専門学校を訪れている。

十九日　朝より来人、材木のことにて。午前中、学校へ材木見に行く。広島県人学生会行く。二十円学生会寄付みやげ。
二十日　外室なし。学校行く。
二十二日　雨天。来人、西忠義、学生二人。木島茂。
二十四日　晴天。外室なし。来人、天野、吉原、竹下、池上、信州金田。学生佐多（正蔵）外一人。医学卒業生一団体、新医学士、礼に来る。
七月八日　晴。午前中、学校行。

高橋琢也は 5 月以降、7 月末（5 月 6 日～29 日、6 月 25 日～7 月 6 日、7 月 12 日～27 日）まで関西地方を中心に募金活動を行っていった。高橋琢也日記[18] には

五月六日　午前七時半、宅出発。東京駅八時半発。大阪地方旅行。
五月二十九日　朝九時半、東京駅着。
六月二十五日　午前八時半。東京駅発にて関西地方出発。
七月六日　朝八時半、東京駅着。
七月十二日　（日記には内容が記載されていないが、前後関係からいってこの日に関西に向かった模様）。
七月二十七日　朝八時半帰京す。

と書かれてある。これらに先立つ半年前、高橋琢也は東京医学専門学校設立への努力が認められ勅撰の貴族院議員に選ばれた（大正 8 年 1 月 27 日）。高橋琢也日記[18] には大正 8 年 1 月 27 日に貴族院議員に選任されたときのことが記載されてある。その日の晩、たまたま学生の後藤哲雄、佐多正蔵らが高橋琢也を訪れていたが、高橋に懇々と説教（＝意見）を受けていたようである。その最中に、東京毎日新聞や大阪日日新聞の記者が高橋琢也の貴族院議員就任への取材に訪れた。親友の水野錬太郎議員もお祝いに駆けつけた。

大正八年一月二十七日　十二時半、浅野家葬式。夜七時頃、貴族院議員勅撰選任せらる。夜分、来人。竹下、学生後藤（哲雄）、佐多（正蔵）。やまと新聞秦、意見中に来る。東京毎日、大阪日々、畑耕一、やまと前田、水野錬太郎。

翌 28 日、高橋琢也は貴族院に出向き、挨拶周りを行なった。とくに推薦者であった原敬総理大臣を訪れ、さらに政友会幹事長山本達雄、中橋徳五郎文部大臣らのもとへ挨拶に伺った。1 月 29 日に高橋是清（たかはし　これきよ）、後藤新平、金子堅太郎らを訪問し、さらに浅野（長勲）家を訪れた。高橋琢也の最も信頼する方々であった。

一月二十八日　参内、貴族院両議長挨拶。内閣各大臣に挨拶す。原（敬）、山本（達雄）、中橋（徳五郎）訪う。昼帰宅。来人、愛知県知事、松井茂、沖縄内務部長和田潤。電話、髙木兼寛（慈恵医学専門学校創始者）、峰村、肥田理吉。来人、中本寅太郎（卒業生）、高橋隆晴、佐藤、奥村光子。電報、△田辰え、大阪三谷、本田仙太郎、手島貫一。来人、安楽兼道、小柴菊子、池上、矢崎。
二十九日　志ぐれ日。二人曳にて、高橋是清、床次、後藤新平、徳川議長、大岡議長、海軍大臣、外務大臣、陸軍大臣、高橋光威、伊藤己代治、金子（堅太郎）、渡正元。午後より浅野（長勲）家。久留会葬、谷中（やなか）。

高橋琢也は 1 月 31 日に貴族院に初めて登院した。

一月三十一日　貴族院初出勤なす。

高橋琢也の親友、中橋徳五郎は大正 7 年 9 月に文部大臣（大正 7 年～11 年）となった。中橋は文部省専門学校局長・松浦鎮次郎と折り合わず、すぐに

松浦を京城大学の学長に左遷した。松浦鎮次郎は大正 7 年 4 月 11 日の東京医学専門学校認可に対して最後まで反対し、大正 7 年 4 月 7 日早朝には高橋琢也に「東京医学専門学校を認めるとしても、無試験資格は決して認可しない」と電話で述べていた[18]。松浦鎮次郎が文部省から去ったことで、「指定校」の認可は容易になったといえる。

大正 9 年 4 月 13 日に中橋徳五郎文部大臣の手によって「指定校」の認可が東京医学専門学校に与えられた。高橋琢也と学生達が待ちに待った一瞬であった。これによって東京医学専門学校の学生達にとって大きな目標が達せられたのである。のちにこの日が東京医科大学の開学記念日となった。

大正 9 年 4 月 15 日には「指定昇格祝賀会」が学生と教職員の手で東京医学専門学校の校庭で大々的に行なわれた。東大久保の地はひっくり返るほどの興奮の坩堝であったのであろう。記録[5] では

「沛然として降り注いだ昨日来の豪雨も、今朝は麗かな太陽の光を見る事が出来たのを何より嬉しく思った。時は大正九年四月十五日の朝、虚空を劈く花火の爆音に誘われて、三々五々会場なる我が校庭目がけて集った。道路には緑門を設け、滑稽なビラを貼り、色々の旗を立てなどして景況を添えた。広き校庭には幾多の天幕を張り、高い舞台を築き、沢山の椅子が並べられてあった。委員に上げられた人々は、各自準備に忙しく、雨上りの泥濘を馳駆して居った。午前十時、愈々振鈴と共に学生着席、次いで父兄保証人。教授職員、来賓の順序で、紅白の幔幕を回らした式場に着かれた。時に、喨々たる軍楽隊の音曲起り、其の妙えなる旋律は吾人の平静なる心に波打たせた。軈（やが）て本日の花形たる本部長が、悠々と壇上に現れた。」

と、うれしい状況が描かれてある。次いで、かつて本部会委員長であった後藤哲雄が立って開会の辞を述べた[5]。

後藤哲雄　—　我校が大正七年四月十二日認可されてから丁度二ヵ年になる。それが今度文部省から指定を許された。是れ高橋総理を初め佐藤校長並びに諸先生のご尽力に由って得た賜物といわねばならぬ。一方我々学生が、此の四五年間花花しき奮闘によって、当初の目的が達せられた訳である。吾々は真に今日の此　盛典を祝福する。目下高橋先生に対し、其の謝恩の事に就て計りつつあり。本日は学生一同、及び父兄保証人、来賓の方々と共に相会して、以って祝賀の意を表さんとす。

君が代と祝賀の歌を一同で合唱したのち、高橋琢也が祝辞を述べた[5]。

高橋琢也　—　本校が是迄認可専門学校であったのが、今度指定専門学校となった事は、昨日の官報で発表された。之を祝さん為めに此の祝賀会を催されたのを、衷心から悦ぶ次第である。

此の学校の創立に関して、自分は最初から聊か努力した。其の努力の結果が今日の悦びを得た訳である。余り悦べば自画自賛となるから、只心の中を披露して御礼を申上げる次第だ。その祝辞に代うるに、私の所感を述べんと思う……。

諸君が大正五年五月以来、実に口で言われず、筆でも書き尽されぬ程苦心された。其の苦心の甲斐があって茲に一の専門学校を造り上げ、之で一の苦痛は免れ得るに至った。自分はそれが初めから出来る事だと信じて居た。而して何事も放擲して専ら学校の設立に力を尽くした。ところが自分が当初の見込み通りに、不完全乍らも指定を得る迄に運んだ。

此の指定を得る迄には献身的に学校へ骨折られた方がある。殊に校長は色々と便宜を与え呉れて、ご援助下さった。然し私共が如何に努力したればとて、諸君が満 4 ヶ年の間の努力がなかったならば、此の事が成就しなかったのである。

此の長い年月の間、自分達が一旦血判してまで誓った事を反故にしまいとして、飽く迄も堅き団結をして居たから、私が微力なるにも係らず、力を尽くす事を得たのだ。世にいう薄志弱行の奴輩なら、決して此の結果を斉らす事が出来なかったのである。四百有余名の覚悟が、此の学校を築き上げたといわねばならぬ。社会は諸君に向って却て謝意を表するであろう。

諸君の期待せる所に、将来医育の機関が備え付けられ、世間に貢献する所極めて大なる事は、今日指定を得られた事に依っても知られる。本校の認可が指定となった、その経路に就ては諸君の普く知らるる所である。

茲に諸君に一言申上げたいのは、今日の時勢には運動というものが盛に行なわれて、何事も運動をしなければ出来ぬ様になった。その運動の中には、甚だ香ばしからぬものがある。随分世の中には色々の手段を講じて、自分の目的の為めなら、其の手段を選ばぬという悪い風習がある。甚だ面白くない事だ。殊に学校において然り。然るに吾校では卯の毛で突いた程も卑劣な事をやらなかったのを、他に誇りとする。

私は是非正義と常理のために、当局者と幾回戦ったか知れぬ。私は目下自分の信頼しつつある理想の評議員を、東京、横浜、大阪、神戸から二十名選抜しつつある。既に承諾を得たのが十三名、後は七名だ。之等の人々に本校の事を委たなら、本校の基礎が益々強固になる事と思う。以上の所感を以て本日諸君の御祝に代うる次第である。

祝賀式が終わったのちは、校庭で記念写真撮影となった（**写真 4**）。写真では、高橋琢也が中央の前二列にいて、その横には佐藤達次郎校長の姿がある。高橋琢也の前には後藤哲雄（本部会委員長）が地面に膝を立て座っている。十二時丁度にお祝の花火が華々しく打ち上げられた。校庭には模擬店が設けられ、多くの訪問者が訪れた。屋内ではマンドリン合奏、義太夫、筑前琵琶、尺八、三弦琴などの演奏が行なわれた。野外では、学生達による曲芸、剣舞、演劇、仮装行列、喜劇、舞踊、野村万造、万作、万助らの能狂言が催された。この日の東大久保の医学校構内は大変な賑やかさであった。

写真 4　指定認可の祝賀記念撮影（大正 9 年 4 月 15 日）：第二列真中の白いマフラーをまとった方が高橋琢也。向って左の方は佐藤達次郎。高橋琢也の前には本部会委員長の後藤哲雄がいる。

東京医学専門学校に「指定校」の認可がおりて、卒業をこの年まで留保していた後藤哲雄、三輪新一ら（旧 4 年生）にもめでたく医師の資格が与えられた。この年 3 月にかつて本部会で活躍した長委三美や同級の馬詰嘉吉、原三郎らが東京医学専門学校を卒業した。彼等にも医師免許が無試験で与えられたのはいうまでもない。この年には卒業を留保していた学生を含めて 172 名の学生が一挙に卒業したのである。彼等の卒業アルバム（大正 9 年）には当時の学校生活が写真として生きいきと挿入されてある（東京医科大学歴史資料室保存）。この中に佐藤進、中橋徳五郎、石黒忠悳（いしぐろ　ただのり）らの書の写真が入っているが、それらは当時の学生達が記念に持ち帰ったようである。

前述のように大正 7 年 4 月 11 日に東京医学専門学校が創立されたのち、学生達は周囲をはばからず高橋琢也に対して直訴を行ない、無試験資格の認定（＝指定認可）の早期獲得と学校設備の充実を催促していった。そのため、創立後数年は高橋琢也は募金活動で寧日の無い日々を過ごした。大正 7 年には高橋琢也と家族は麹町の大きな屋敷を既に売り払って、四谷の小さな家屋を借家し、心身ともに医学校のために捧げていた。大正 8 年 2 月に（私立）日本医学専門学校は文部省に「指定」の申請を出し、9 月にそれが認められたことから、東京医学専門学校の学生達はその早期獲得を高橋琢也に迫った。しかしながら、明治 36 年施行の「専門学校令」では、学校設立より 2 年たたなければこの「指定認可」は得ることが出来ないという規定になっていた。東京医学専門学校の設立認可は大正 7 年 4 月 12 日であるので、結局は最短でも大正 9 年 4 月 13 日を待たなければ「指定」は認可されなかったのである。事実、大正 9 年 4 月 13 日に「指定」の認可は最速で東京医学専門学校へ届いた。そこには高橋琢也の地道で精力的な請願活動と原敬総理大臣と中橋徳五郎文部大臣の好意と助力が大きかったといわれる。当時の多くの学生達はそのような事情はほとんど知らなかったと考えられる。高橋琢也は東京医学専門学校設立と「指定校」認可などの功績により、大正 9 年に天皇陛下から銀杯を贈られた。内閣総務課の高橋琢也の履歴（高橋琢也追悼号[9]）には大正 9 年 11 月 15 日の日付で「大正四年及至九年事件の功に依り銀杯一組下賜」と記載されてある。「大正四年及至九年事件」とは日本医学専門学校の学生達のスト

ライキによって始まり、東京医学専門学校の設立と指定校の認可に至るまでの一連の事件のことをいっている。

3.　学生達の大学昇格への運動

大正 9 年 4 月 13 日に指定の認可が東京医学専門学校へ届いたことから、学生達の大きな目標は達成された。しかしながら、大正 8 年に「大学令」が制定されたことにより従来の専門学校は大学への昇格の申請が自由に出来るようになった。これを契機として公立、私立を問わず、全国の専門学校は大学への昇格を目指すこととなった。この動きは燎原の火の如く全国に広がったといわれる。このような動きに対して東京医学専門学校の歴代の校友会委員長は大学への昇格を大きな目標とせざるを得なくなった。とくに日本医学専門学校が大正 12 年に大学昇格のための書類を文部省に提出し、大正 15 年にそれが認められてから、その運動はますます激しくなったと考えられる。校友会委員長はその交渉にしばしば高橋琢也を訪れている。それに対して高橋琢也は決して首を縦に振らなかった。長野 子〈東京医学専門学校昭和 4 年卒業〉がその辺の事情を詳しく残している。

在はせし日　　長野　子

大正十四年入学当初から学校創立当時より今日に至るまで、高橋先生の義侠心に始り、先輩諸兄の奮闘史を折にふれ時につけ幾度かきかされた。それ以来学年の進むに従い異彩ある学校だという認識が漸次深まり、先生に対する感銘がまた漸く深からんとする時、勃然として台頭し来つたのが学校第二段への進歩たるべき大学昇格問題であった。希望は人生の生命であり、朧を獲ては蜀を望み、専門学校として完成すれば更に大学に昇格せしめんと希ふ、それはあまりにも必然の要求であった。

此時、我々は想えり、我にこの先生あり、先輩あり。而も創立以来幾星霜、多数の卒業生を擁せり。此等を打って一丸となる時の大学昇格何物ぞ。正に意気衝天、熱風雲を呼んで校を被い、遂に飽和せる風雲は「**大学昇格期成同盟**」[22] なる結晶となりて到来せり。

それからと云うもの先生の後を入り変わり立ち変り追い回す様にして昇格運動に寧日なき有様であった。こうした時、先生は他にご多忙の御身にかかわらず、吾々学生には常に快く応接されて、我々の主張をよくきかれ、且つ意のある所はよくお話しもして下さった。当時のことを回顧すれば限りなく想い出多きことではある。いつの日であったかまだ学校の焼けない以前のこと、教務の後の名ばかりの図書室であったと思うが、先生の列席を願って昇格委員会を開いた事がある。先生は各委員の母校愛に燃ゆる熱心な主張を一々肯づかれ乍ら聞かれ、又それに答えられた。最後に私が「最早昇格問題が叫ばれて幾歳、常に同様なる会合の結果で遅延されてきている。此際、我々は先生の何年後には斯うすると云う確定的の御解答を戴き度い。」と云った時、先生は口を開かれて「いやそれは……」と濁される様な御言葉が出はじめたので、私は後の御言葉を待たないで「いやそれは……―では、最早我々は承服出来ません。強いて我々は先生の御明答を希望いたします。」と御尋ねした時、先生は先生は静かに椅子から立ち上がられて鋭いが又恩愛に満ちた御目を一増細くされて「英国のある大政治家が事の大小はあれ、現在の私の立場と同様のはめになった時、斯ういう答弁をなされた……」と云われて、その政治家の言葉を引用されて到々鉾先を避けられて終わった。そしてじっと私の顔を見つめられた時、先生の目頭は潤いをさえ感じられて、私は其れ以上追及し得なかったことがある。

其当時は「貴族院の長広舌を以って通る先生の口にはとてもかなわん」と云う様な気がしたが今にして思えば、先生は当時どれだけ昇格問題について苦慮されていたかと云うことが余りにも明瞭に心に浮んできて、御心を御察すると、寧ろ御気の毒であったと云うより外ない。酷い例かも知れないが、之倒極貧の父に何も知らぬ子供が本でもねだる様なものでなかったろうかと思う。此の父の苦しい立場、一方子供の切なる父への願い、父は寝食を忘れても工面しよう、足りなければ自分は裸となっても子供の願を充し、その喜ぶ顔を見て人間至上の満足とする父性愛こそ高橋先生の御心境ではなかったであろうか。

此時であった。突如として起る火災、忘れんとしても忘れることの出来ないのである。昭和三年三月二十日午後一時、大久保原頭に警鐘は乱打され、消防自動車の耳を劈く響きは一瞬にして我等

の母校を、血と涙でこれまで育て上げてきた母校を一物も残さず灰燼に帰してしまった。その昔、家なき子を救い、また家なき子等を背負う。校父高橋先生の御心中や如何。世にも御気の毒な慈父は遂にこの痛手に子供に本を買い与えるより先ず住居とパンを与えなければならなくなった。されど家は焼けても十余年間育て上げてきた健全なる子等は慈父の与うる一片のパンに　再生し、父を扶け、自ら働き互いに鞭撻して辛苦粒々、旧に倍する再建を実現し、昇格問題も愈々具体化せんとしてきた今日、突如として先生の訃報に接す。

嗚呼、何たる痛恨事ぞや。回顧して波乱重畳、山は崩れ、地は裂け、天は轟き、猛火地を掃くとも、宇宙の原則は厳として動ぜず。滔滔として来りては去る歳月の流れは過去の一切を忘れたが如くあらゆる変遷を抱擁して、早や半年を過ぎたり。と雖も先生の御遺志は炳として我々の胸に残る。此の御心を体して我等一致協力母校の隆盛を致し、以って泉下の御霊を安んじ奉らんとす。

このように、大正 15 年より昭和 3 年にかけて学生達は大学期成同盟を設立し、しばしば高橋琢也を訪れ、「大学への昇格」を直訴していった。一方では学生達は「大学への昇格」のための資金集めも精力的に行なっていった。学生達は高橋琢也には授業料の値上げを迫った。高橋琢也は授業料の値上げは頑として受けつけなかった。このような学生達の大学昇格運動に対しては、佐藤達次郎校長も一貫して反対した。佐藤達次郎はその一方では学生達には勉学とスポーツの両立を訴え、それらに対しては学生達を終始鞭撻した[2)]。しかしながら、学生達の大学昇格への昇格運動は益々激しくなっていったようである。ところが昭和 3 年 3 月 20 日の午後に東大久保敷地内に火災が発生し、基礎講座の建物が焼失した。そのため、学生達の集めた資金（三万円）はその再興に使用されることとなった[2)]。それ故、高橋琢也が逝去した昭和 10 年初めまでは、大学昇格への運動は一時お預けとなってしまったのである。高橋琢也が逝去したときの校友会委員長・佐々木重臣の追悼文[9)] には

破顔一笑　　交友会委員長　第四学年　佐々木重臣

昔は知らない。高橋老先生が、私共全学生を前にお話なされるのは入学式と校友会大会のときだけであった。そして、この時は老先生はおからだの無理をなさってまでも必ず見えられた。私共の知っている限りは、老先生は和服を召して居られた。白髭慈顔の老先生が私共全学生の前にお見えになった。最後は昨年の第十七回校友会大会記念式であった。あの日、晩年おからだの御不自由であった老先生は、側近の人達に助けられて演壇にあがられると、目の前に居並ぶ全学生をしばし無言に見わたされて。まずにっこりと微笑まれたのである。（中略）

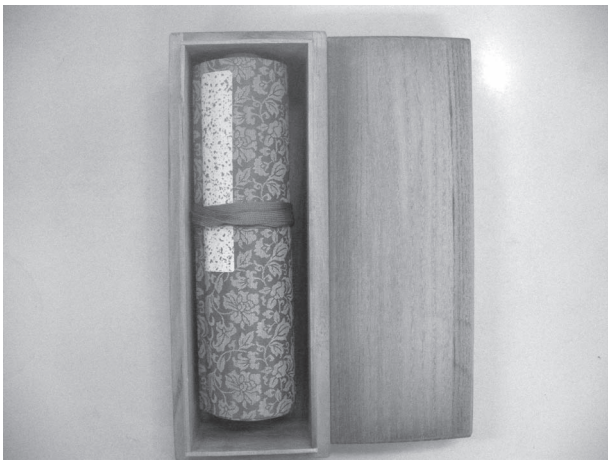
昨年の中秋のある晩、逗子のあの素朴な御別荘に、授業料値上懇願のため、前委員長にお伴して五、六人でお訪ねした。老先生は八畳間に安生せられ、私共は先生を取囲んでよろしく坐った。老先生は私共の用件と腹の中を見抜かれ、私共が申しあげようと用意してきたことを御自分でみんな言うてしまわれた。私共はすっかり機先を制せられ、うっかりしている間に、私共は授業料値上尚早を諭されているのに気がつくまもなく、はては、孫を相手の様の先生の楽しげな、ながいながい昔語りに煙に巻かれているうち、老先生は奥の方に向って手を二度ほど拍たかれた。女中さんが顔を出すと、「氷嚢を持っておいで」と言われる。どうなされたかと私共は心配した。「どうも学生を相手に嬉しくってつい長く話し込んでいると、頭がぼうとしてくるんじゃ。まだたった八十九じゃが。」と、老先生は女中さんが持って来た氷嚢を頭に載せて鉢巻された。私共はおいとませざるを得なかったのである。「さすがは老先生だ……」。私共は、なにがなにやらとにかく感激して夜道を帰ったのであった。

と記述されてある。当時の学生達が高橋琢也の晩年に至るまで「授業料値上げの要請」と「大学への昇格運動」を行なっていたことがこの文章から分かる。

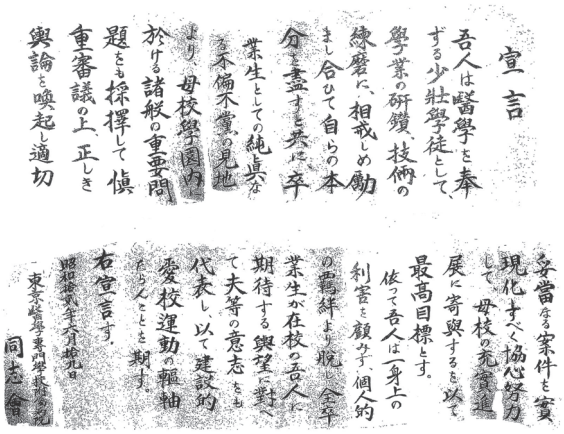
高橋琢也が逝去したのち、唐木秀夫（昭和 9 年卒業）らの卒業生達は血判状を募って大学昇格運動を再び活性化していった（昭和 12 年）。この血判状は第二の血判状として大学歴史資料室に保存されている（**写真 5A**、**B**）。

宣言

吾人は医学を奉ずる少壮学徒として、学業の研



（A）



宣　言

吾人は醫學を奉ずる少壯學徒として學業の研鑽、技倆の練磨に、相戒め勵まし合ひて自らの本分を盡すと共に、卒業生としての純眞なる不偏不黨の見地より、母校學校内に於ける諸般の重要問題をも採擇して慎重審議の上、正しき輿論を喚起し適切妥當なる案件を現化すべく協心努力して、母校の充實進展に寄與するを以て最高目標とす。

依って吾人は一身上の利害を顧みず、個人的の羈絆より脱し、全卒業生が在校の吾人に期待する輿望に對へて夫等の意志をも代表し、以て建設的愛校運動の樞軸たらんことを期す。

右宣言す。

昭和十二年六月十九日

東京医学專門學校附屬病院

同志會

（B）

写真 5　第二の血判状：（A）巻物（昭和 12 年）（桐箱入り）；（B）第二の血判状の宣誓文

鑽、技倆の練磨に、相戒め励まし合いて自らの本分を尽すと共に、卒業生として純真なる不偏不党の見地より、母校学校内に於ける諸般の重要問題をも採択して慎重審議の上、正しき与論を喚起し適切妥当なる案件を現実化すべく協心努力して、母校の充実進展に寄与するを以て最高目標とす。

依って吾人は一身上の利害を顧みず、個人的の羈絆より脱し、全卒業生が在校の吾人に期待する輿望に対えて夫等の意思をも代表し、以て建設的愛校運動の枢軸たらんことを期す。

右宣言す。

昭和十二年六月十九日

東京医学専門学校附属病院

同志会

（以下　血判）

建設的愛校運動とは東京医学専門学校を大学へ昇格させるための運動を意味している。佐藤達次郎は大学への昇格に対しては長年反対の立場をとっていたが、昭和 16 年の高橋琢也の命日に、突然大学昇格運動を開始することを宣言した[2]。恐らく佐藤達次郎は「医学は実学であり、専門学校で学ぶのが良い」という高橋琢也の信条を長い間大切にしていたのであろう。昭和 16 年には高橋琢也の七回忌が明けたことから、佐藤達次郎はこのような方向転換を行なったと考えられる。しかしながら、この佐藤達次郎の「大学昇格運動」も太平洋戦争の勃発によって頓挫することとなった。東京医学専門学校が大学へ昇格したのは戦後の昭和 21 年（5 月 15 日）になってからである。

4.　校歌「ヒポクラテス」の謎

東京医科大学の校歌「ヒポクラテス」は東京医学専門学校雑誌第二号〈大正 14 年〉[13] の誌上で初めて発表された。この校歌は一番より四番を含む「其の一」と一番より六番を含む「其の二」からなっている。作詞は「荒城の月」の作詞などで有名な詩人、土井晩翠[22] と書かれてある。しかしながら、校歌の原稿は大正 12 年 4 月頃に当時の東京医学専門学校の学生によって校友会会計係りの文箱から偶然に発見されたといわれる。原稿の入手の経緯は大変謎めいており、誰が土井晩翠に校歌の依頼をしたか学校が調査したにも拘わらず不明のままであったといわれる。原稿の発見ののちに、東京医学専門学校から土井晩翠に正式に連絡を取った形跡はなく、謝礼もなされていない。校歌「ヒポクラテス」の発見については東京医科大学学報[12] に寄せられた故原三郎名誉教授の文章が大いに参考になる。

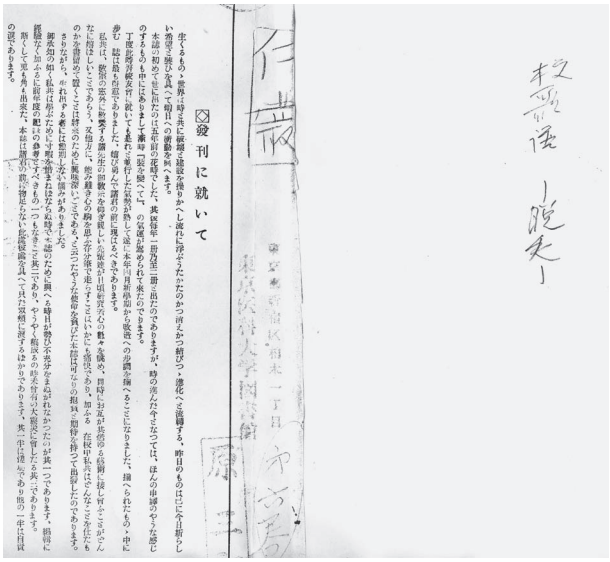
校歌の由来　（名誉教授　原三郎）

校歌 “ヒポクラテス” は大正 15 年春に完全に出来上ったと見られる。作詞は詩聖とも云われる土井晩翠で作曲は平野主水である。作詞は大正 14 年 3 月に発行された校友会発行の東京医学専門学校雑誌第 7 巻第 2 号に発表されている。この時には作曲は出来ていなかった。**作詞の原稿は大正 12 年 3 月卒の高橋北民校友会委員長の後をついだ井上勝委員長の時に会計委員の片根勝雄が前委員か**

ら引継いだ文箱の中から土井晩翠の作詞原稿を発見し、清水教頭、佐々教授に相談し誰が晩翠に依頼したかを調べたがとうとう名のる者なく図書委員に学校から調査費を渡したが回答は得られなかった。校友会雑誌の編集委員であった内海栄（旧姓安田）は学校に学術雑誌のないことを嘆き校友会雑誌を東京医学専門学校雑誌と改め、内容を学術雑誌に改めた人であったが、この人が中心となってこの作詞を校歌として発表した。私は大正 13 年 5 月に欧州留学から帰って教授となっていたので相談を受けた。内海は同級生に平野恒がいたので作曲を恒の伯父の陸軍戸山学校軍楽隊長平野主水に依頼した。そして急速に出来た。平野楽長は金円を受けとらず百円の時計を呈上したように思う。作詞者晩翠には学校として礼もなく終ってしまった。楽長は部下をつれて高橋翁の銅像前で学生に歌い方を指導した。私も前列に加わった。昭和 2 年の文化祭には全学生が歌った。この普及には民謡研究会の荒瀬精一らがつとめた。他に類例のないすばらしい校歌である。戦後ますます歌われるようになった。

このような経緯で発見されたのが東京医学専門学校校歌の歌詞である。土井晩翠作詞といわれる校歌「ヒポクラテス」の原稿は実にぞんざいな形で会計部の文箱に入れられてあったと寺師順一（大正 9 年卒業）の談として伝えられてある。現在、大正 13 年の東京医学専門学校雑誌第一号[23] は故原三郎名誉教授より寄贈された一冊のみが東京医科大学医学部図書館に存在する。その巻頭部を開いてみると表紙と最初の数ページが脱落しているが、本の見開きの部分に原三郎名誉教授の鉛筆書きで「**校歌譜、脱失**」と書かれてある（**写真 6**）。恐らく、この「脱失」の部分に校歌の発見の経緯が書かれてあったか、土井晩翠による原稿の写真が掲載されていたのでないかと想像されるのである。大正 12 年に発見された土井晩翠作といわれる校歌の原稿は現在まで行方不明であり、原三郎名誉教授のこの注記も意味が深いと考えられる。なお、土井晩翠が逝去したのちの昭和 38 年頃に土井晩翠の娘婿・中野好夫氏（著名な英文学者）が東京医科大学に入院したさいに大学として正式に校歌の作詞に対してお礼をしたことが伝えられている。

筆者は東京医科大学の入学式、卒業式で校歌「ヒポクラテス」を長年歌ってきたが、原三郎名誉教授の文章を読んで、果して作詞者が土井晩翠であるのであろうかという、いくばくかの疑問を持つようになっていた。そこで 2009 年の夏、この疑問を解くため、土井晩翠が生涯のほとんどを過ごした仙台に向った。まず訪問したのが、土井晩翠の母校で土井晩翠資料室が設けられている立町小学校（創立：明治 6 年）であった。そこには全国から寄せられた土井晩翠作の校歌の CD が展示されていた。東京医科大学校歌の CD もこの中に入っていた（仙台在住の同窓のどなたかが寄贈した模様）。案内を受けた教頭先生に尋ねてみたところ、土井晩翠が東京医学専門学校の作詞者であるかどうか充分に把握していないということであった。蛇足ながら、数年に一度、土井晩翠に作詞を依頼した全国の学校が集って校歌を披露する「土井晩翠校歌祭」が立町小学校で開かれている。また立町小学校の校歌は土井晩翠によるものである。


◇發刊に就いて

生くるもの、世界は時と共に絶間なく進歩を遂げつゝ流れに浮ぶたかつ消えつゝ、進化へと發展する、昨日のものは直に今日新らしい希望と喚び立て、今日へ明日へと躍動を興へます。

本誌の初めて世に出たのは五年前の時でした、其後毎年一冊乃至二冊宛のありますが、時の流れは今と変つては、ほんの申訳のやうな感じのするものも中にはありまして漸々「編集者の熱」が冷して遂に本年の月刊出版から敬遠への歩調を揃へることになりました、揃へられたもの、中に書むし結局は最も良思でありました、殊に編集者の苦心の點、多幾め、時時に対する苦悩が基礎の為時に徒し所の苦心がこんなに程度しにくいであらう、又他方に無理の為に無理を重ねる苦労は、本誌を目出度発行に漕ぎ付けるまでの間、多くの人々の御厚意に対する感謝の念は、本誌の発行に際して、深く心に刻まれてあります。

顧みて、本誌は最初の数年間は、本誌の発行に関する苦労は、本誌の発行に関する苦労は、本誌の発行に関する苦労

国と民とのためつくせ

その日、筆者はさらに土井晩翠の旧居を改造した晩翠草堂（仙台市青葉区）を訪れた。ここでも校歌「ヒポクラテス」に関する答は得られなかったものの、土井晩翠に関する資料のほとんどが仙台文学館（仙台市青葉区）で保管されているので、そこに行けば何か分るのでないかと教えてもらった。そこで、仙台文学館に事前に連絡し承諾を得て、次の日そこを訪れた。仙台文学館で案内を受けた司書の方から土井晩翠が作詞をした全国の校歌（140校）を載せた本を見せて頂いたが（黒川利雄編集：晩翠先生校歌集）[24]、その中には東京医学専門学校の校歌は含まれていなかった。さらに土井晩翠日記[25]も紹介してもらい、それを精読した。この日記は土井晩翠の昭和初期からのものであるが、そこには土井晩翠が担当した校歌とその依頼者とのやりとりや謝礼について簡潔に書かれてあった。校歌の作詞に当たっては必ず依頼した人物や学校名が明らかとなっている。しかし東京医学専門学校校歌に関する記載は全くなかった。このように筆者の仙台での調査では校歌「ヒポクラテス」は土井晩翠の校歌リストや日記の中には掲載されていなかったことから、それが土井晩翠の作であるという充分な確証は得られなかった。

東京医学専門学校校歌「ヒポクラテス」が正式に公開されたのは大正14年刊の東京医学専門学校雑誌（第2号）[13]である。この中には以下のように「其の一」、「其の二」が提示されている。「其の一」は現在歌われている校歌であり、「其の二」は今では幻の校歌といわれる。

其の一

第一番　ヒポクラテスの名によれる　ギリシャの昔その道の
光明西の朝ぼらけ　東亜はさらに遥かなる
神話の陰ににおう跡　源流二つ彼とこれ
世々に広めしいさおしの　仰がざらめや尊さを

第二番　その千歳の遠きより　洋々の末はてしなく
知の一切を料として　万物の霊人類の
病を救う仁の術　修め学びて帝城の
北の一隅幾百の　青春の子等睦みあう

第三番　威を官学の名に借らず　ただこれ力誠より
湧き来る励身を駆りて　倣うは三たび肘折りし
いにしへの跡世にいでて　藁屋の中も玉楼の
上も等しき人の子の　生の恵を補わん

第四番　道の蘊奥理の極み　深きに限りあらざるを
歩々の進みに人界の　福利次第に増すものを
蒼海のうち一滴の貢献　われの責として
功成るとき我が校の　名に功名をなさしめむ

其の二

第一番　万物の霊人類の　病を救う仁の術
修め学びて帝城の　北の一隅幾百の
青春の子等睦みあう

第二番　威を官学の名に借らず　ただこれ力誠より
湧き来る励身を駆りて　わが天職にこころざし
三たび肘折る跡追はん

第三番　藁屋の中も玉楼の　上も等しき人の子の
病を癒やす尊さを　省み思い此道の弊あるところ警しめん

第四番　ああ源流のはるかなる　医学の光一切の
知を料として進み行く　道の蘊奥理の極み
深きに限りあらざるを

第五番　蒼海の中一滴の　貢献われの勤とし
民の喜び世の恵み　功挙げて校の名に
また光明を増さしめん

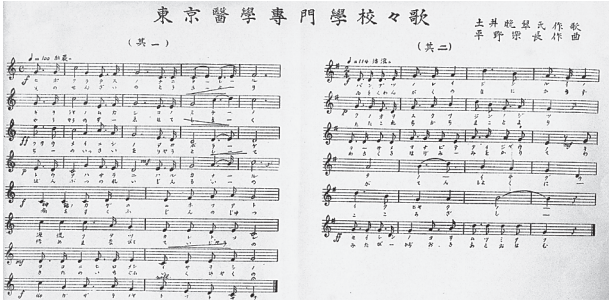


写真 7　校歌ヒポクラテスの楽譜（其一と其二）（平野主水作曲）：楽譜は其一と其二で異なる。

これらの 2 つの歌詞にはいずれも平野主水（ひらの　もんど）（陸軍戸山軍楽隊長）により作曲がなされた（大正 13 年頃）。その詳細な楽譜は東京医学専門学校、昭和 3 年の卒業アルバムに載せられてある（**写真 7**）（これらの楽譜の原本も大学には残されていない）。二つの校歌のうち、「其の一」が校歌として現在まで歌われてきている。また、「其の二」は現在ではそれを知る人は少ない。土井晩翠によるといわれる東京医学専門学校の校歌の「原稿」が東京医科大学には現存しないことから、この作詞者が誰であったかの最終的な確認は難しい。そこで、校歌の歌詞の文脈を読みながら、校歌の作詞者を推定してみたい。筆者は数年間の東京医学専門学校の資料の調査によって作詞者が高橋琢也であるように思えるからである。高橋龍二氏（高橋琢也先生の孫）も「森林杞憂（復刻版）」[26] の巻頭言の中で校歌「ヒポクラテス」の一節に高橋琢也の森林杞憂の一部が挿入されているのでないかと指摘している。以下、その根拠を校歌「ヒポクラテス」の歌詞に基いて順次述べてみる。

第四番の歌詞は校歌の中でも最も格調高い、深遠な意味をもった部分である。

第四番　　道の蘊奥理の極み　　深きに限りあらざるを
歩々の進みに人界の　　福利次第に増すものを
蒼海のうち一滴の貢献　　われの責として
功成るとき我が校の　　名に功名をなさしめむ

実は、この一節は高橋琢也が明治 21 年に書いた「森林杞憂」[26] の中の第五章の一文とほぼ一致する。

森林杞憂第七章
彼のアダムスミス氏出でて、以来天下の経済全く一新して工業殖産の理、其蘊奥を極め、竟に後世の経済家をしてスミス以前スミスなし、スミス以後スミスなしと迄賛評せしむるに至りたり。然れども林業は別に社会に対する一大責任を負うが故に、未だ自由営業を専行する能わず。何ぞや国家の安寧を維持し、社会の福利を増進すること是れなり。故に地勢に応じて施業の種類を撰定せざる可からず。

この中で、「工業殖産の理、其の蘊奥を極め」は校歌の「道の蘊奥、理の極み」と一致するし、「林業は別に社会に対する一大責任を負う」は「（社会に対する）貢献我の責めとして」と同義である。また、「社会（＝人界）の福利を増進すること是れなり。」は「人界の福利次第に増すものを」と完全に重複するのである。高橋琢也の「森林杞憂」[27] 第五章におけるこの文章は実は高橋琢也の恩師の西周が文部省御用掛りを務めていた明治 19 年に、文部省より公布された「帝国大学令」第一条の「帝国大学は国家の須要に応ずる学術技芸を教授し、及其蘊奥を攻究するを以て目的とす」[28] とも重なる部分であり、「森林杞憂」の中で最も格調高い文章の一つである。高橋琢也は「森林杞憂」のこの文章をそのまま校歌 4 番に入れたのでないかと筆者は考える。また、「福利増進」は高橋琢也の終生にわたる政治的信条であった。高橋琢也が大正 4 年に創立した立憲青年同盟会の規約には「福利増進」が明確に奉戴されてある[29]。「福利増進」が校歌 4 番の中に入れられているのはこのような背景があると考えられる。

次に、校歌第三番について検証する。

第三番　　威を官学の名に借らず　　ただこれ力誠より
湧き来る励身を駆りて　　倣うは三たび肘折りし
いにしへの跡世にいでて　　藁屋の中も玉楼の
上も等しき人の子の　　生の恵を補わん

第三番の歌詞の冒頭「威を官学の名に借らず　ただこれ力誠より」は高橋琢也日記（大正7年4月6日）[18] の中の一文がつよく反映されていると考えられる。この日の日記には松浦鎮次郎（文部省専門学校局長）が高橋琢也へ電話したさいに、「決して指定は認めませんよ。」という松浦の威圧的な言葉に対して、「どこまでも**官学**主義」「言語道断の申し条なり」と松浦鎮次郎に対して大きく反発したことが記されてある。東京医学専門学校設立に最後まで反対した文部省局長・松浦鎮次郎の官僚的な態度に対して、それをはねのけて学校認可にこぎつけた高橋琢也の気持ちは第三番の冒頭の「威を官学の名に借らず」に良く表れている。文部省は本来、明治元年に開校された「開成学校」に起源を求めることが出来ることから、文部省自体が官学そのものであった。また、松浦鎮次郎は東京帝国大学を卒業している。「威を官学に名を借らず」とは大正7年当時の文部省と、文部官僚・松浦鎮次郎（専門学校局長）に対する高橋琢也の反発の気持ちを表していると考えられる。さらに高橋琢也はこの一文を校歌に入れることにより、「東京医学専門学校はあくまで専門学校を貫き、大学への昇格は考えない」ことをはっきり表明したと考えられる。明治23年に東京農林学校が東京帝大農学部へ昇格されるという問題が起ったさい、高橋琢也は最後まで猛烈に反対した。このことは、わが国の林政史の中でも良く知られている事実である[30]。高橋琢也は実学を重んじていて、高橋には林業や医学の勉強はあくまで専門学校でなすべきであるという終始一貫した思想があった。昭和初期の学生達はしばしば「威を官学の名に借らず」と高唱していたことが記録に残されているが、彼らはその深い意味は知らずに歌っていたのであろう。また、高橋琢也は東京医学専門学校の学生達の大学昇格運動とは常に一線を画していたが、当時の学生達はその真意を理解していなかったようである（第三章に詳述）。

第三番の「倣うは三度肘を折りし」の一節は高橋琢也が大正5年7月15日に日本医学専門学校を総退学した四百数十名の学生達の前で「医業の如きは人の生命を掌どるものであるから、自から一層の難事を伴うに到るものである。孔子は三度肘を折って良医となると言われたが、その困難を想像しての話である」（奮闘の半年、125ページ）[6] と訓話したことと一致している。

さらに、「藁屋（わらや）の中も玉楼（ぎょくろう）の　上も等しき人の子の　生の恵（めぐみ）を補（おぎな）わん」の一節は、高橋琢也が信奉していた「王政復古令」の中の「堂上も地下も等しき」に由来すると考えられる。高橋琢也は「王政復古令」と「五箇条のご誓文」を日本の近代化の大きな礎であるとして、生涯それを信奉していた。幼年時より辛酸を嘗めた高橋琢也にとって「王政復古令」と「五箇条のご誓文」に述べられた「堂上（どうじょう）も地下（ちげ）も等しき」や「上下心を一にして盛んに経綸を行なうべし。」などの文言は「身分の上下のない新しい時代の到来」を示したとものとして共鳴すること大であったと考えられる。「ヒポクラテス」第三番の一節「藁屋の中も玉楼の上も等しき人の子を」は医療を受けるには上下身分の差がないことを意味するが、明治維新直前に出された王政復古令にある「堂上（どうじょう）も地下（ちげ）も等しき」と同義である。この校歌の一節には高橋琢也の思想が色濃く写しだされているし、さらに推論すると、高橋琢也は自らの渾名「**子玉**」を密かにここに入れたのでないだろうか（「**玉**楼」と「人の**子**」→子玉）。子玉とは高橋琢也が明治維新後に自身で名付けた渾名であり、西周が「森林杞憂」[27] の巻頭言で「高橋子玉は広島の産なり。」「子玉たちまち其長たる所に籍て独逸山林学の諸書をひもとき」と記載しているほどである。昭和3年の卒業アルバムの中には高橋琢也の書「忠炳日」（**写真8**）が載せられてあるが、その中にも子玉の書名がなされてある。筆者は第三番のこの「藁屋（わらや）の中も玉楼（ぎょくろう）の　上も等しき人の子の　生の恵（めぐみ）を補（おぎな）わん」の一節が高橋琢也が校歌「ヒポクラテス」の作詞者であることの大きな証であると考えている。

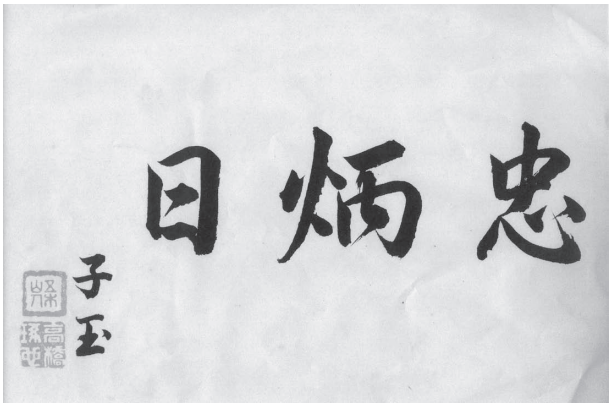


写真8　高橋琢也書（忠炳日）：子玉（高橋琢也の渾名）で署名されている。落款は五木山人と高橋琢也

さらに、二番の歌詞について考察してみよう。第二番は

その千歳の遠きより　　洋々の末はてしなく
知の一切を料として　　万物の霊人類の
病を救う仁の術　　修め学びて帝城の
北の一隅幾百の　　青春の子等睦みあう

となっている。第二番では「帝城の　北の一隅、幾百の青春の子ら睦みあう。」の一節について筆者はとくに注目する。何故なら、東京医学専門学校は帝城（＝皇居）の北ではなく、西に位置するからである。では何故「北の一隅」となるのであろうか。その鍵は高橋琢也が明治 22 年に刊行した「町村林制論」[31] の中にあると考えられる。この町村林制論の第七章に

元来普魯士は独逸の北隅に一小団地を占め僅かに十五世紀中八十万里の地を以て起こりしが歴代の王侯相将賢明英邁の人に富み、戦えば勝ち攻れば取り今や終に六千三百三十五万里を領して班を大国に列し、中欧に雄飛する国なるを以て、其兼併し回復する所の土地各々旧時の制度を異にし俄かに之を改めんとすれば忽ち古来の慣習を破りて民治に不便を感ずるの恐れあるより旧法を其儘襲用する所最も多し。

という一節がある。この文章中の冒頭の「独逸の北隅（＝プロシャ）の一小団地」と「賢明英邁の人材」は各々、校歌二番の「帝城（⇒ドイツ）の北の一隅（⇒北隅の一小団地）」と「幾百の青春の子ら（⇒賢明英邁の人材）」に置き換えられる。第二番の歌詞は、「東京医学専門学校は（プロシャのように）帝都の北の一隅にあり小さな学校であるが、有能な人材が多く出て、我国の医学界を席巻するであろう」ということを意味していると考えられる。このように、この校歌二番は高橋琢也著「町村林制論」[31] に出典を見出すことができる。高橋琢也は明治 20 年頃、プロシャの森林制度にとくに共鳴していた。第二番には数百の学生達に託した高橋琢也の思いが「町村林制論」の一文を借りて表れている。

このようにしてみると、第一番

ヒポクラテスの名によれる　　ギリシャの昔その道の
光明西の朝ぼらけ　　東亜はさらに遥かなる
神話の陰ににおう跡　　源流二つ彼とこれ
世々に広めしいさおしの　　仰がざらめや尊さを

の中で、「源流二つ彼とこれ」は従来は「医学の源流は古代ギリシャに発した西洋医学と古代中国に発した東洋医学である」と解釈されてきたが、二つの源流とは「日本医学専門学校を総退学した学生達」と「彼らを応援した順天堂医院の医師達」であるとことを密かに伝えているのでないか。第一番でヒポクラテスの名前を提示することにより、東京医学専門学校は医学の勉学の場であることを示すとともに、その源流は学生達と順天堂医院の流れに辿ることが出来るということを堂々と歌い上げている。第一番と第二番の歌詞により、この校歌は東京医学専門学校のものであることが自然と分かるようになっている。また第二番と第三番には高橋琢也が生涯、信条としていた「仁」と「誠」が「病を救う仁の術」と「ただそれ力誠より」という歌詞に挿入されている。校歌「ヒポクラテス」には東京医学専門学校に対する高橋琢也の満身の思いが歌の隅々まで込められていると考えられる。このように意味の深い校歌は全国でも稀で、叙情性がつよい土井晩翠の作風とは大きく異なるものがある。ただし、5、7、5 の韻律に関しては土井晩翠の作品と同様に見事である。高橋琢也は漢詩、短歌、俳句にも素晴らしい作品を残し[32]、また「森林杞憂」や「町村林制論」のような名文を著していることから考えても、校歌「ヒポクラテス」の作詞は朝飯前であったと考えられる。比較のために、土井晩翠の作詞による校歌と歌を二、三あげてみる。

旧制第二高等学校校歌　天は東北山高く　（明治 38 年作）

天は東北山高く　水清き郷七州の　光教の因るところ
庭のあしたの玲瓏の　霧に塵なし踏みわくるわれ人生の朝ぼらけ

花より花に蜜を吸う　蜂のいそしみわが励み不断の渇きとめがたき
知識の泉掬みとらん　湧きたつ血潮青春の　力山をもぬくべきを

（中略）

彼と等しく享けし種　咲きて我世の花たらば
薔薇とにおえる蘭麝の香
土またさらば香しゆう　第二高等学校の　名に
伴わん常久の栄

岩手医科大学校歌

ああ生々の徳のあと　天地の光人界の　喜び仁
の術はあり
病める弱れる悩めるを　救わん仁の術ここに

奥羽のもなか杜の陵　中に今見る我が校舎　高
き尊き天職を
かしこみ受けて幾百の　健児学びの窓による

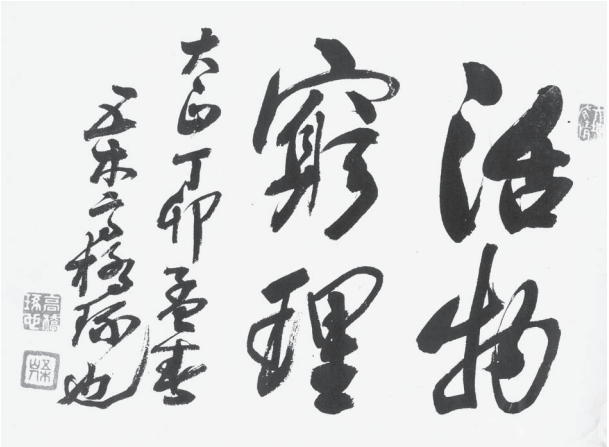
こころを治め技を錬り　日々向上の一筋に　わ
が青春の血ぞあつき
三たび肘折るのりのあと　見よ杏林の風薫る

ああ我が健児昔より　知の一切を料として　進
み来りし道に入り
人類愛の名によりて　世に光明を照らしめよ

天地有情より（明治31年）

天地有情の夕まぐれ　わが驂鸞（さんらん）の夢さめて　風
楼いつか跡もなく
花もにほいも夕月も　うつつは脆き春の世や
その江上の霞たちきりて
縫へる仙女の綾ごろも　袖にあらしはつらくと
も　「自然」の胸をゆるがして
響く微妙の楽の声　その一音はここにあり

土井晩翠の校歌や詩歌は漢文を基調としているが、内容は哲学的ではなく、むしろ軽快で官能に訴えるものが多い。また、「世に光明を照らしめよ」（岩手医科大学校歌第四番）のように相手に訴える言葉をしばしば用いている。校歌「ヒポクラテス」では常に自省的である。例えば「名に功名を増さしめん」（第四番）をとりあげると、土井晩翠であれば「名に功名を増さしめよ」と作詞したであろう。昭和4年に作詞された岩手医科大学校歌（当時、解剖学教授・鈴木直吉が第二高等学校の恩師・土井晩翠に依頼したことが、岩手医科大学の大学案内に書かれてある）は一部、校歌「ヒポクラテス」の歌詞と重複している部分がある。「仁の術」「幾百の健児」「青春」「三たび肘折るのりのあと」「知の一切を料として進み来りし」などがそうである。しかし、岩手医科大



（A）

（B）

写真9　高橋琢也書「活物窮理」:（A）向って右上に「天地有情」の落款が押されてある。左下端には「高橋琢也」と「五木山人」の落款が押されてある。（B）「天地有情」の落款

学校歌の歌詞は「ヒポクラテス」の歌詞とは作風と内容において似て非なるものがある。

土井晩翠への作詞の依頼者は岩手医科大学では鈴木直吉（解剖学教授）であったが、東京医学専門学校では誰が土井晩翠に依頼したか、学校で調査費を渡して調査したにもかかわらず不明であった。このことも、校歌「ヒポクラテス」が果して土井晩翠の作であったのか謎を呼ぶのである。

本章で記述した推論はあくまで筆者の推測であり、異論の方も多いであろう。しかしながら、土井晩翠の原稿の発見が大変謎めいていることや、土井晩翠による校歌「ヒポクラテス」の原稿が現存しない以上、土井晩翠が作詞者であるという証明も難しい。筆者が校歌「ヒポクラテス」の作詞者を高橋琢也とするもう一つの拠り所は、高橋琢也の落款が「天地有情」であるということである。この落款の印鑑は東京医科大学に現存しているし、昭和 3 年の卒業アルバムの中にも実際使用されている（**写真 9**）。「天地有情」は土井晩翠を一躍有名にした処女詩集のタイトルでもある。明治、大正時代の人たちは「天地有情」と聞けば誰でも土井晩翠を思い出す。もし、大正 12 年に発見された校歌「ヒポクラテス」の原稿に「天地有情」の印が押されていたならば、それを見た学生達は、また職員でさえも土井晩翠の作と思うのでないか。但し、大正 11 年 3 月まで校歌募集の責任者であり東京医学専門学校の文芸部長であった小宮豊隆（こみや　とよたか）（ドイツ語教授）は土井晩翠とは旧知であったことから、それが小宮の目に入れば筆跡からその真贋はすぐに明かになったであろう。しかしながら、小宮豊隆は校歌の原稿は発見された当時（大正 12 年 4 月頃）はドイツに留学していた。あえていうならば、小宮豊隆が欧州留学の途について、学友会・会計部の文箱に「ヒポクラテス」の原稿が入れられたともいえる。

学生達は東京医学専門学校開設以来、校歌の選定を急いでいた。東京医学専門学校雑誌でしばしば校歌を募集している。東京医学専門学校卒業生の杉山泰治、安部達人らが投稿したが最終的にはそれらは採用されなかった。筆者は中々校歌が決まらない学生達を見るに見かねて、高橋琢也自身が作詞をして、そっと校友会の会計係りの文箱に入れていたのでないかと推理するのである。この原稿に高橋琢也の「天地有情」の落款が押されていたかどうかは、原稿が残っていないので確認するすべはない。しかしながら、東京医学専門学校卒業生の一人がそれを保存していて、現在も保存されている可能性は高い。当時、高橋琢也のいくつかの書、佐藤進、中橋徳五郎、石黒忠悳らの書は卒業アルバムには写真として残っているが、すべて大学には現存せず、卒業生が記念に持ち帰った可能性が高いからである。唯一、大学所有の高橋琢也の書「医国手　救人心」（**写真 10**）も卒業生の川野琢也氏（昭和 26 年卒業）より提供されたものである。このように、校歌「ヒポクラテス」の作詞者を巡っては謎が残されたままであるが、土井晩翠がどのような人物であったかも希薄になってきた現在、それは致し方ないことであろう。

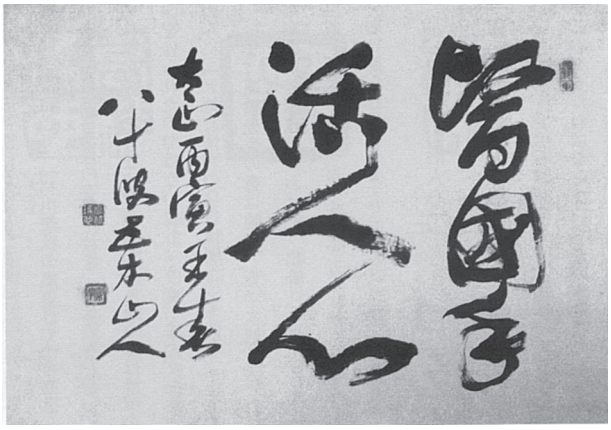


写真 10　高橋琢也書「医国手　活人心」: 五木山人の書名がある。

5.　高橋琢也の寄附募金活動

東京医学専門学校が 4 月 11 日に設立されたのちも、高橋琢也は毎日のように寄附の依頼活動を続けている。多くは関西と東京の著名な財界人と政治家に対してであった。高橋琢也日記[18] にはその詳細が記述されてある。それらを大正 7 年 4 月 28 日より大正 8 年 4 月 26 日までの高橋琢也日記から抜粋する。

四月二十八日　天気好し。来人、橋本、藤原（銀次郎）代理、飯田、竹下（文隆）、帝国連合青年会理事、渡辺鬼子松顧問となる。（入金一千円也、王子製紙記念品として）。

二十九日　曇天。八時より自動車にて後藤（新平）外相、団琢磨、指田葬式、上野停車場、藤原銀次郎、上野松阪や下駄。展覧会望む。夜に至り、医学生。竹下（文隆）、松原。絵画九十六本売代残金入金全部相済み。

五月三日　好天気。朝より横浜行き。市役所、神奈川県庁、ガス局を訪い、知事、市長ともに寄附を承諾す。安藤重起にも依頼。十一時横浜発。品川新宿を経て十二時半帰宅なす

四日　午後八時発上野駅。原敬氏。大風朝より△田隆吉、小池張造、和田維四郎、船越（光之丞）、原嘉道（百円也寄附）、大橋、伊東己代治（高橋光威、評議員承諾安楽兼道同じく）、原敬。

五日　朝より、加藤、大橋、井上（角五郎）、波多野敬直（百円寄附入金）、高田鎮蔵、上野広島女子郷友会演説。

六日　好天気。自動車、朝、後藤、藤原（銀次郎）、小田良治（壱千円也寄附）（山本条太郎寄附金千円也入金）。四谷警察署長、新宿警察署長を訪う。花井（卓三）、磯村、山田直也、米山、岩崎（小弥太：三菱、学校建築に五千円援助入金）。

七日　朝、自動車にて朝吹（常吉）、山中（燐之助）、大橋（百円也）、銀行五十円預け。岩崎小弥太、米沢清治、岩崎久弥、堀田（正睦）伯、松平頼寿、前田侯、古市（光威）、小山田信（協賛）。

八日　朝より三△へ行く。米山梅吉、中田、尾崎、福島。渡辺嘉一、若宮（正音）、西村直、山科（礼蔵）、ラサ島会社。

4月28日より5月8日までに、橋本、藤原銀次郎、渡辺鬼子松、後藤（新平）外相、団琢磨、神奈川県知事、横浜市長、安藤重起、原敬、△田隆吉、小池張造、和田維四郎、船越光之丞、原嘉道、大橋、伊東己代治、高橋光威、加藤、大橋、井上角五郎、波多野敬直、高田鎮蔵、小田良治、山本条太郎、花井卓三、磯村、山田直也、米山、岩崎小弥太、朝吹常吉、山中燐之助、大橋、小沢清治、岩崎久弥、堀田（正睦）伯、松平頼寿、前田侯、古市光威、小山田信、米山梅吉、中田、尾崎、福島。渡辺嘉一、若宮正音、西村直、山科礼蔵らを次々と訪れ、高額の寄附を受けている。ラサ島とは恒藤規隆（つねとう　のりたか）が社長を務めるリン鉱石採掘会社であるラサ島株式会社のことである。ラサ島会社より10,500円という高額な寄附が寄せられている。現在の1億円以上価値がある。さらに日記[18]は続く。

五月九日　宝田（石油）、東京府。

十日　雨天。朝七時半、自動車にて中島（久万吉）、後藤（新平）、伊東己代治、古河、浅野（長勲）侯、△田、松原（入弐千円也）。海軍大臣。（千五百円也出）。

十一日　好天気。自動車七時半出。村井吉兵衛、岩原謙三（百円也、百円也）。北海拓殖、逓信大臣（神田鐳三の添書を受く）。中川健三（急設郵便局新設を電話依頼す）。朝吹常吉（五百円也入金）。

十二日　好天気。外室なし。来人、自由評論記者木村、小田柿捨次郎、寄附金百円也入金。

十三日　曇。八時、自動車にて浅田徳則（評議員承諾）。朝吹（常吉）へ礼。神田鐳三（三千円也寄付、三年間）。酒井忠克。大隈重信（弐百円也寄附）。

十四日　七時半より。後藤（千円也入）。村田一郎（百円也即金）。外務中村、吉田。内務永田、杉山（茂丸）。安田善三郎、堤、小倉常吉、古河（財閥）の石井。

十五日　村井、山本（達雄）、石黒（忠悳）、豊川、河田（百円也寄附）。新井（五百円也）、藤井（百円也、原嘉道）。竹下、伊藤貞次。

十六日　石黒（忠悳）、豊川、警保局長、内務省、松昌洋行、橋本新治郎、杉山茂丸、山林局長、水産局長、逓信大臣、川崎銀行。夕より紅葉館

十七日　雨天。森田館、龍名。同じく支店。関根や、佐々木総館。島平、紅木や、植木や、東京駅ホテル、泰松銀行、中井銀行、日本銀行、三井、高田組、高木益太郎（評議員受諾なす）、内務省、大林区署。

十八日　天気。七時、自動車にて山脇、繁盛館、精養軒、有名館、大方館、山科、吾妻や。高橋光威、大倉（喜八郎）、寺尾（亨）、田中龍蔵、尾崎三良、井上侯爵、芳川伯、仲小路（廉）、池松、徳川義臣侯、俵、渡辺（川田龍吉百円也）。

十九日　外室なし。田中喜代次、竹田直光、天野、横手、沖縄より謝電。

二十日　雨天。外室なし。肥田理吉（壱千円也、神田鐳三）。百円也大橋新太郎。

二十一日　銀行預け（千弐百円也）。星野、豊国銀行、小倉、原（敬）、後藤（新平）、勧業銀行、加藤啓三郎、古川、宝田（石油会社）、（（五百円也）恒藤、中井銀行、製鋼所、大岡。

二十二日　好天気。医学校。

二十三日　好天気。七時半より自動車。佐藤公債

渡す。松原、松平直之、波多野承五郎、館田延太郎、周布公平、日芳館、古市（光威）、井上孝哉。富山県知事、山田義之助、大給近幸子爵、久米良作（百円也）、酒井伯、原町。

二十四日　雨天。後藤、長崎、村井（吉兵衛）

二十五日　曇り。午後より松平直之祖母葬式。上野精養軒、武井（守正）の祝。九時半帰宅。

二十六日　曇り。中島（久万吉））、三上（忠造）、下田（歌子）、松本、安川、高岡、古市（光威）、武井（守正）、上杉、中野、佐々木、中橋（徳五郎）。安田、久保田、小松原（英太郎）、清浦、一木（喜徳郎）、犬市、大倉（喜八郎）、浅野（総一郎）、宮島、内田、徳川伯

二十七日　午前十時、学校。午後より文部省、常盤華壇。明治絵画会の会。佐々木。

二十八日　朝より、田所（美治）、山中（隣之助）、文部省（試験問題を協定す）。花井（卓三）、中井、磯村、三井の団（琢磨）、野崎。（来人、天野、竹内、伊藤弥の番頭、学生大勢）山本、池田、藤村、安田、食事。中島（久万吉）、高田商会、東洋海上の日向。古川の石井、藤田鎌一、和田（維四郎）、原（敬）。四時帰り。（五千円也古河寄附）。

二十九日　雨天。十時半より浅野侯爵家結婚式。伏見宮第一王女恭子女王殿下、御帰家ならせらるを、むかえに参ずる。来人、池上、両野、学生大勢。

三十日　中島（久万吉）、門野重九郎、野村龍太郎、村井（吉兵衛）、横山広一郎、古河、西村、宝田（石油会社）、久原（房之助）、森田退蔵（百円也）。国光生命五月分利子納め。大倉組、小倉、渋沢（榮一）、阿かやの坂本。北海拓殖納免、水越、帝国生命の久原有信。古河（入五千円也）。

三十一日　曇。自動車にて古河、浅野（長勲）侯、渋沢（栄一）、松平乗承、三共会社、三越、藤田鎌一、警視庁、高峰譲吉。川崎（銀行）へ（五千五百円也預け）。

六月一日　曇り。自動車にて塩原又作、浅野総一郎、白石元次郎、山田陽朔（四十五、弐百円）即金。西村直、森村市左衛門、小松謙次郎。

三日　雨天。和田。船越（百円也）。小池清一、古賀（上海分校の話）。田口謙吉（弐百円也）。留守中、川部理事官。

四日　天気雨。三島、土方久徵（二百円也即金）。徳川公、辰野金吾、中野、大川、田中事務所、中原（百円也）。

五日　曇。八時より久野正一、山口宗儀、柴野広義、久保田清秋、辰野金吾、藤田鎌一、帝国シャンパン会社、逓信次官、石塚栄蔵（二百円也）。

六日　天気。七時半より賀田金三郎、仲小路（健）、中野、中井銀行（百円也）。三共会社、三越、大川、田中事務所、あかじや、田村、大倉組、十五銀行、伊東己代治、水町。

七日　曇。六時より大井の安部浩、加瀬忠次郎（百円也）。警視庁、原敬。

八日　久野正一（百円也）、久保田、渡辺、角田、前川、深田米次郎（百円也）、加島、石渡、田中事務所、安藤取引所、田尻、藤田鎌一郎、警視庁、後藤（神戸の事二、三約束）。神田倶楽部、三越。

九日　日曜日。電車にて大崎の湯川、大井の小松原（英太郎）。来人、横田千之助の紹介人手塚。八日森林の地木。△かんの△書を黒井に送る。

十日　雨ふり。品川（圭介）、加藤、中橋（徳五郎）、樺山、村井、日本銀行、農商務省、加島精一、杉山茂丸、橋本新次郎。ひる帰り。堀田（正睦、参百円也）。製鉱所。芸備の友記者。

十一日　山本達雄、波多野承五郎、織田昇次郎、加島精一（百円也）、逓信大臣、北海拓殖、和田維四郎、藤田謙一。昼帰り。来人、大阪日々新聞記者。

十二日　七時半、自動車にて。吉村鉄之助、藤瀬、園田、西村、日比屋、室田、水野、河原、河村。

十三日　自動車にて、後藤（新平）、床次、陸軍大臣、波多野（敬直）、織田、水町、前川、日本銀行、郵船会社、鉄道院、第百銀行。来人、沖縄人麓。佐藤達次郎

十四日　後藤、海軍省、外務省、伊東己代治、渡辺修、松平乗徵、早川、中村、佐々木、松平頼寿、中野武兵、上杉、松浦伯

十五日　松本、木村、伊東、村井、大谷、外務省、杉野（九十円、五百円也文晁代金受取）。三井鉱山部、銀行部。興業銀行。

十六日　外室なし。来人、小柴保人。午後より築地精養軒、浅野侯婚礼披露会望む。

十七日　田健次郎、小野錬太郎、山科礼蔵、松本康吉、小林政吉（川崎へ五百九十円預け）。百

円京都井上友子送る。

十八日　午前八時三十分東京駅出発。関西旅行。絵画八百枚持参混合。名古屋市名古屋ホテル。岐阜市玉井や。京都富、中島。広島吉川。神戸後藤か西村。大阪自由亭。岡山市。

石塚より（二百円也）、大隈（重信）より（二百円也）、堀田（正睦）伯（参百円也）、（五百円也（五百円也（五百円也恒藤）、深田（百円也）、中井新右門（百円也）

七月十二日　入（二百円也田口謙吉）。百円久野昌一。会計壱千七百円也。

大正八年二月

三日　貴族院、宮内省、山本達雄礼。

四日　雪ふりつもる。天野。吉原の代人、永田貞四郎、柳泉一枚遣す。子爵松平頼和家人

六日　天気。朝より村井吉兵衛。林野管理局、久原（房之助）、藤田謙一。午後より内田康哉、安楽謙道、医学校。

七日　貴族院。高橋光威。

十日　天気。九時より貴族院。交友倶楽部（五百円也寄附金。野口遵）。

十四日　雨天。九時より貴族院、久原（房之助）、藤田（謙一）、大川、△田礼。

十五日　好天気。古谷、福本、団、紅葉館。

十七日　好天気。佐藤、元田（肇）、林、中橋（徳五郎）。

二十日　大風。朝より大角（桂厳）、竹下（文隆）、吉川、葉山高橋邸。

二十二日　雨ふり。後藤新平。原田佐五治。貴族院。黒田侯爵婦人会葬行。

二十五日　秋山雄之助、森格、高峰譲吉、久原（房之助）。十円瀧口小為替。藤田謙一。勧業銀行。交友倶楽部。

二十六日　貴族院。高橋光威見舞。大谷伯見舞。来人、品川圭介。天野。百円宅用。二千円御料林。水戸松木材費払下。

二十七日　天気晴。午後より外室。森格、高峰（譲吉）。藤田謙一。北海道拓殖会社。橋本新次郎（三百円）。金水館。

三月七日　貴族院交友倶楽部。来人、小柴（保人）、竹下（文隆）。四百円甲州杉材木。竹下渡。二千円也、吉原組

十三日　貴族院、古賀廉三、神田鐳蔵、早川千吉郎。波多野承五郎。金子（堅太郎）。山下汽船会社。大川事務所。三時半帰り。貴族院出。田村清願。紀田辰之助。岩田八作。徳川議長招待会費出。

十七日　池田謙三、大川事務所、早川（千吉郎）、山田、波多野、中橋（徳五郎）、神田銀行、貴族院。夜十時帰り。入（二千円也、神田鐳蔵、受取）川崎（銀行）入。

二十二日　朝より、自動車にて渡辺嘉一、蔵内、吉川伯、井上侯、西村正、仲小路（健）、成清、賀田、小川、藤原、小田。

二十七日　九時半より貴族院閉院式望む（壱千円也、貴族院済費）。正午、帝国ホテル首相招待。

四月一日　九時半頃より横浜行き。知事、市長、大谷、若尾。五時半より木挽町花や。首相招待招る。寄付十円也。京都住谷省一。

四月二日　床次、古橋、原（敬）、高橋（光威）、金子（堅太郎）、伊東（己代治）、品川（圭三）、中橋（徳五郎）、山本、中村、井上、山中、下條、井上角五郎。

四月三日　自動車にて、田俵、蔵内次郎作（寄付、壱千円申込）。井上侯、尾沢、田、中島久万吉。指田義雄（五百円申込、内百円入）。団。

四日　朝より自動車にて。渡辺嘉一、津軽伯、中野、井上侯、高橋、床次、外務省、陸軍大臣（協賛）、小笠原伯（三百円申込）、橋本新次郎（三百円入金）。

五日　小川平吉、田辺熊一、浅野総一郎、白石元次郎、田坂、森村、室田緒明、園田、吉村（蜂須賀侯協賛）、政友会四時帰り。日比谷、前田米蔵協賛、嶋田敏雄同上。

六日　自動車にて。午後より園遊会行く。中目黒藤田四郎別荘。

十日　午前八時、東京駅発、大阪行き。

十九日　朝、帰京。静養なす。午後一時半、明治絵画会。ラサ島会社招待、上野精養軒。

二十四日　上杉伯、秋本（興朝）、花井（卓三）、三井、早川（千吉郎）、柴田、山下汽船、田中、大川、東京府知事、営繕課長、田尻、安田善三郎、堤。

二十五日　晴。正午より自動車にて森格事務所、

内務省（次官）、警方保局長、地方局長、久原（房之助）、藤田謙一、ラサ島会社、宝田（石油）会社。北海道拓殖会社。秦豊助（三百円申込）。夕五時、木挽町みどりや、内藤（確介）等の招待（内藤、松波、白沢、和田、木村、田中、佐藤、招待行く）。電気局長協賛。通信局長（七名紹介）。農商務次官協賛。小産局長。金子（堅太郎）。林権助。

二十六日　自動車にて内務大臣、陸軍大臣、外務大臣、商工局長、鉱山局長、遠藤吉平（二十円寄附申込）、高橋光威、田中清助、申込書三枚渡す。村井吉兵衛。小川平吉、勧業銀行。司法省。中川一介、雪下陽、森格（五百円申込）。

以上記述したように、高橋琢也の募金活動は貴族院議員としての活動とは別に精力的に行なわれている。高橋琢也日記[18] は高橋琢也が如何に全身全霊、東京医学専門学校の充実を願いながら毎日行動していたかを示す類を見ない日記である。高橋琢也日記[18] は大正 5 年より大正 12 年までのものが原本、写本、復刻版を含めて東京医科大学歴史資料室に保管されている。

6.　東京医学専門学校の黄金時代

大正 11 年に東京医学専門学校の学生達や同窓生たちは念願の高橋琢也の寿像（**写真 11**）を著名な彫刻家・朝倉文夫に依頼した。その除幕式は高橋琢也の出席のもとで大正 13 年 12 月 17 日（高橋琢也の誕生日）に開催された祝賀校友会大会において行われた[13]。祝辞は野上義三郎（校友会会長）が述べた。

東京医学専門学校総理　高橋琢也先生。　先生の偉徳を永く記念せん為め、高風を写して本校校庭に銅像を建設し竣工る。大正 13 年 12 月 17 日は先生の第七十八回の誕辰の佳日に当る。本日茲に式を挙行せらるるに際し、吾等校友会員もまた本日校友会大会を開催して祝賀の意を表示せんとす。

それ本校はその創立に於て世の学校と選を異にし、一つに先生の仁侠による所なり。先生は爾来十年一日の如く老躯を提げて東奔西走只管本校の為めに尽悴せらる。吾等の感謝措く能わざる所なり。今や本校は学校に於て病院に於て内容外観次第に整い、大東京医科大学の基礎完からんとす。先生の健康は尚お壮者を凌いで矍鑠たり。希くは本校の為めに益々努力と指導とを賜わらんことを。

今日以後朝に夕に先生の慈愛の御風貌に接する事を得る吾等学生は又幸なる哉。吾等先生の薫陶を辱うし、その徳を慕うもの、本日先生の銅像除幕式に際して衷心の歓喜些か思う所を述べて祝辞とす。

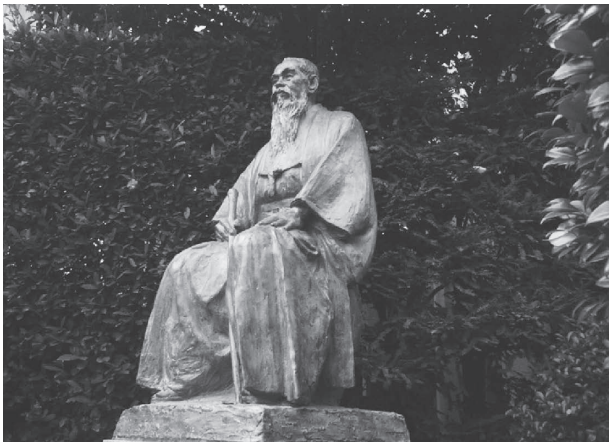


写真 11　高橋琢也寿像（東京医科大学東大久保キャンパス）

高橋琢也は返礼として次のように述べた。

この銅像建立の件については度々相談を受けましたが、その都度ご辞退申して居た。それは何故か。実は私には銅像は了解出来ない。私ほど不徳なものはない。何等世の中に功績を残していない。唯、東京医専を残した事に就いてかくも結構な銅像を建てて頂くことは私として心苦しいと申し上げる以外、申し上げ様がない。大正五年から皆様の御承知の如く多少の努力はしたが、しかし、これは人間として当然なことをしたに過ぎない。本日、この除幕式により初めて見て、何と言っていいか言葉がない。かかる結構な銅像を拵えていただいた。これに対して皆様に謹んでお礼申し上げます。

この寿像は現在でも東京医科大学の本部キャンパスにあり、大学の将来を静かに見守っている。また、昭和 8 年 4 月には借家住まいの高橋琢也を心配して、卒業生達は東京医学専門学校附属淀橋病院の敷地内に小さな家を寄贈した。以来、高橋琢也はそこに住むこととなった。高橋琢也が逝去した時の住所は「寄

留地：東京市淀橋区柏木一丁目五十三番地」となっている。まさに淀橋病院内である。

昭和 2 年、3 年、4 年頃になると、学生達の学校生活は充実して来た。その様子は卒業アルバムの写真を見ると一目瞭然である。昭和 3 年 3 月 20 日の午後に出火による火災が起き、東大久保キャンパス内の基礎系建物は全焼となった。高橋琢也は 4 月より予定通り、貴族院議員団の団長としてアメリカ合衆国やヨーロッパの訪問の旅に出かけ、留守は子息の律人（理事）に任せた。また、佐藤達成次郎校長は当時はヨーロッパに出張中であった。学校の状況を心配した佐藤達次郎が高橋琢也に宛てた手紙が残されている。

拝啓　春陽の候益々御健勝慶賀の至に折存候。扨て日本よりの通信により東京医専大半焼失し赴実に不慮の出来事にて驚愕の外なく、殊に卒業試験並に入学試験等期日切迫の際、一人御心労御察申上候。何分遠隔の事にて詳細の状況並に原因等知る由なく、徒に焦慮□存たり。学生授業、教室並に病舎復興等急を要するもの多く、先生の容易ならざる御配慮並に御努力を俟たざるべからず。先生の御勇気と御健康は障害に因りて倍加さるることは経験により明かなれども、再三之れを反覆し且つ御齢既に八十を超えさせらるるに於ては、頗る御同情申上ざるを得ざる次第に御座候。教室の補として一時左の建物御入用の際、御使用被成下度候。殊に四年級の学生に対しては順天堂医院患者建学の便宜を可有之と存候。「バラック式鉄館（十六間、四間半）、天井低し、中央柱なし、所在地本郷区元町順天堂隣、テニスコートあり」。御入用の節は清水博士或は順天堂事務長武長英三へ御申し付け願上候。先は不取敢御見舞まで。如此□座候。折角御自愛奉祈上候。

敬具

昭和三年三月末日

高橋先生　机下　　佐藤達次郎

残った学生達は必死で建築資金を集め、新しい鉄筋の建物の建築を目指した。学生達が大学昇格を目指して蓄積していた資金もこの建築に回された。新しい建物の設計者は大森茂であった。明治大学の旧校舎建物も大森茂の設計であるが、その建物は現存しない。

新しい建物は昭和 4 年に完成し、現在も第一校舎として残っている。この建物の建築によって学生達の結束は以前にも増して強くなっていった。当時の卒業アルバムにはその様子がありありと残されている。この時期の卒業アルバム（欠本は大正 12 年より昭和元年まで）はすべて東京医科大学歴史資料室に保存されてある。学生達は勉学、クラブ活動を徹底的に行い、優秀で人間味あふれる医師が育っていった。クラブ活動の様子は卒業アルバムに良く残されている。とくに相撲部は昭和 8 年には全国学生相撲大会（大阪毎日新聞社主催）で優勝し、その賞状と優勝旗、写真などが歴史資料室に残されている。また、馬術部、テニス部や野球部にも一流選手が多く輩出した。東京医科大学五十年史〈121-122 ページ〉[2] には

佐藤校長の体育の奨励の意図からあらゆるスポーツ、武道、国技等を奨励してその効果が表れた例をあげる。佐藤校長は自ら相撲を好み、これを鞭撻した。この当時の相撲部は全日本学生相撲の覇権を取り、選手桝岡智等は招待されてアメリカにも行った。相撲部では、小暮行雄、宮尾益一郎、森山秋松等多数の優秀選手を出した。また佐藤校長はテニスを好み、庭球部に対しては自庭のコートを貸したりした。依田安豊は日本最上級の選手となり、武者素助と名コンビであった。その前後に久保清、岩崎辻男、高安康佑、少し遅れて深町庫次等の名選手を出した。なお佐藤校長は剣道部の田林綱太、佐藤（旧姓鈴木）三蔵等の願いを聞き入れて剣道部および柔道部の道場を校長自身の出費で建造した。柔道部では関口恒五郎、牧野武盛等の名選手を出し、その後も各部から優れた選手が輩出した。佐藤校長は自ら乗馬で出校したりして乗馬を奨励し、木村政長等が乗馬部を創って活躍した。要するに佐藤校長の実力主義の教育は医学専門学校前期に至って実行され、学生の勉学精神が高揚されたのである。

と書かれてある[2]。また、学生達は早朝より有名な講師を呼んで講演会を開いていたことが記録に残されてある[2]。東京医学専門学校の附属病院は淀橋病院であったが、その経営は円滑に行くようになっていた。この頃には東京医学専門学校の卒業生から優秀な人材が数多く育ってきて、附属病院でも活躍す

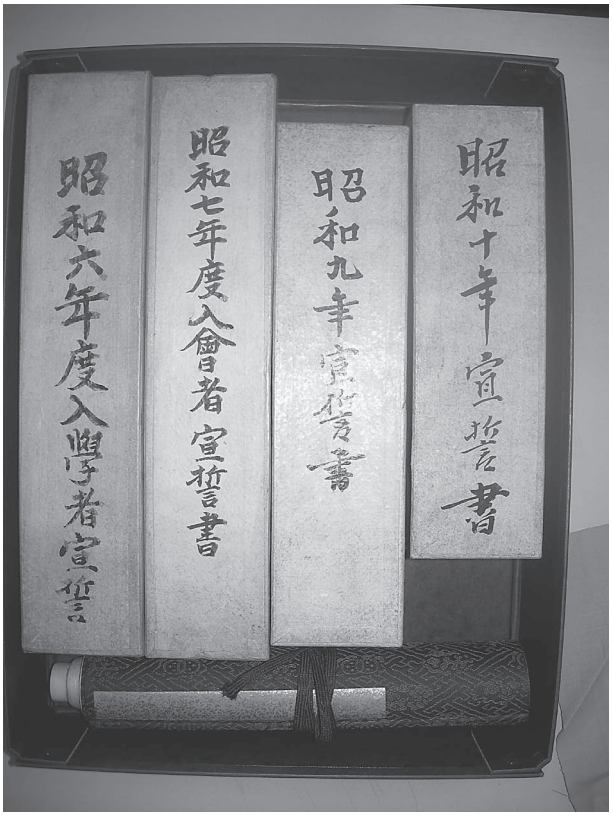


写真 12　昭和 6 年より 10 年までの新入生宣誓書巻物と保存箱

るようになっていた。かつて本部会委員であった小川東洋（内科）、安部路人（精神科）、川目鉄太郎（耳鼻咽喉科）、大正 5 年の血判状では二年生の皮切りとなった馬詰嘉吉（眼科、大正 9 年卒業）らの臨床での活躍は目覚しいものがあった。基礎医学では病理学の佐々一雄（大正 8 年卒業）、薬理学の原三郎（大正 9 年卒業）、生化学の三坂亮雄（大正 10 年卒業）が活躍していた。原三郎は前田夕暮に師事し、短歌の世界でも有名になっていた。馬詰嘉吉も俳人として有名になっていた。昭和に入って東京医学専門学校は高橋琢也が最も夢見た医学校となっていったようである。卒業アルバムには高橋琢也が書を毎回贈っている。**写真 8**、**9** は昭和 2 年、III 年の卒業アルバムに残っている高橋琢也の書（「忠炳日」と「活物窮理」）である。落款も「高橋琢也」「五木山人」「天地有情」などが使用されており、「子玉」の署名も見られる。

当時の学生達の結束振りを示すものとして、昭和 6 年より 9 年まで続けられた入学生の誓約状である（**写真 12**）。血判状と同じように巻物に入学者各自の署名と拇印による捺印がなされてあり、その誓約

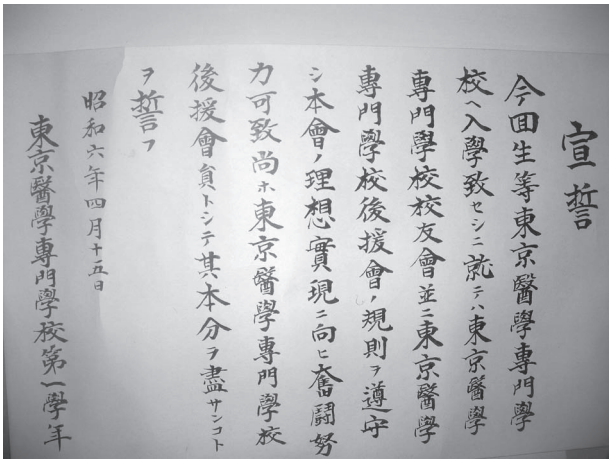

宣誓
今回生等東京醫學專門學校ヘ入學致セシニ就テハ東京醫學專門學校校友會並ニ東京醫學專門學校後援會ノ規則ヲ遵守シ本會ノ理想實現ニ向ヒ奮鬪努力可致尚ホ東京醫學專門學校後援會員トシテ其本分ヲ盡サンコトヲ誓フ
昭和六年四月十五日
東京醫學專門學校第一學年

写真 13　新入生の宣誓文（昭和 6 年）

文は次のようなものであった（**写真 13**）。

宣誓

今回生等東京医学専門学校へ入学致せしに就ては東京医学専門学校校友会並に東京医学専門学校後援会の規則を遵守し本会の理想実現に向い奮闘努力可致尚お東京医学専門学校後援会員として其本分を尽さんことを誓う

昭和六年四月十五日

東京医学専門学校第一学年

（以下、署名と拇印による捺印）

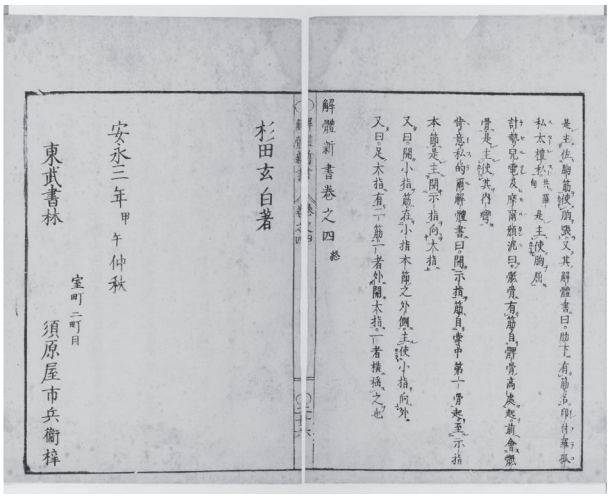
昭和 9 年に高橋琢也は米寿を迎えたが、その日（12 月 17 日）に校友会大会の会場において、東京医学専門学校付属淀橋病院・職員全員によるお祝いの肖像画が贈られている（**写真 14A**）。この作品は昭和初期を代表する肖像画家・北島浅一（東京芸術大学出身）の手によるものである。現在、この作品は東京藝術大学修復科（木島隆康教授）の手により修復されて、東京医科大学歴史資料室に展示されてある（**写真 14B**）。昭和 9 年当時の職員や学生達の結束ぶりと、高橋琢也理事長に対する尊敬の念がこの絵の中に集約されている。

戦後になり、東京医学専門学校の卒業生達は専門学校より昇格した大学の新たな出発を祈って、東京医科大学に多くの寄贈を行っている。代表的なものとして、解体新書初版本（日本医学史会会長、酒井シズ博士によると世界で二つしかない初版本中の初版本であるとのこと）（**写真 15**）を含む、多くの貴重な古文書群である（東京医科大学図書館蔵）。こ

（A）　　（B）

写真 14　高橋琢也肖像画　（A）修復前；（B）修復後

（A）



（B）

写真 15　解体新書初版本の表紙と奥付：（A）表紙；（B）奥付の印刷所が室町二丁目であり、広告がなければ、初版本。室町三丁目であれば、二版以降のものとされる。

れらの多くは久保清（大正 10 年卒業）、内野正幸（昭和 4 年卒業）、渡部潔（昭和 5 年卒業）らによって寄贈された[33]。また、大学記念講堂前にある「ヒポクラテス像」は有名な彫刻家・矢崎虎夫によるものである。矢崎虎夫の作品は東京医科大学病院外来に一つ（ヒポクラテス像）、歴史資料室には二つ（緒方洪庵像、ヒポクラテス像）保存されている。これらの作品は大学記念講堂が完成したときに同窓会（会長：三輪新一）より寄贈された。また、アンリ・マチスの弟子、野崎利喜雄の戦後間もない時期の力作「むくげ」や「新春」なども大学に残っている。千住博の絵画や西野新川の絵画も同様であるが、寄贈者については明らかでない。「自主自学」の扁額（内藤香石・作）や「即是道場」（内藤香石・作）の扁額を含むいくつかの扁額は古守豊甫（東京医学専門学校・昭和 18 年卒業）からの寄贈である。このように草創期より戦後に至るまで、東京医学専門学校を卒業した方々の学校や大学への愛校の想いは特別のものがあった。戦後、昭和 21 年 5 月 15 日に東京医学専門学校は東京医科大学へと昇格した。まさに、東京医学講習所が設立されて 30 年後、東京医学専門学校が設立されて 28 年後のことであり、卒業生達の感慨もさぞ深いものがあったことであろう。

高橋琢也は終生、東京医学専門学校の創立者として理事長（総理）を務めたが、一方では国会では貴族院の闘将として知られていた。その活動は晩年まで続けられた。昭和 5 年の貴族院での演説が最後になったといわれているが、その内容は 10 年後の日本の将来を見事に予言したものであった（長池敏弘著「高橋琢也の生涯とその事跡」）[17]。

> 「国家の滅亡というような不詳な語は無論私は吐きたくないのである。併し（中略）近い将来に於て我国には非常な時が来るだろう。」（昭和 5 年 5 月 13 日貴族院速記録 13 号、156 ページ）

昭和 9 年になると高橋琢也は体調を崩すことが多くなった。昭和 10 年に入り脳軟化症を起こしたが、小川東洋（大正 9 年卒業、東京医学専門学校・内科学教授）が手当てに駆けつけた。小川東洋は本部会委員の一人であり、高橋琢也の信頼が篤い方であった。主治医となって高橋琢也の最後を看取った小川東洋は追悼号[9] に当時の様子を次のように記録している。

故高橋理事長の御臥床より御臨終まで
小川東洋

昭和十年一月十三日、世は新玉の寿酒に酔う初春の夕暮れ、慌しい「ベル」は突如辺りの静寂を破って逗子よりの長距離電話を知らせた。理事長高橋先生の逗子御別邸より、先生には突如御不快になられしとの知らせであった。自分は取るものも取り敢えず、往診鞄を充満させて、一時間余の逗子へと電車は走って行った。（中略）

先生には平常私達教え子を愛児の如く、御慈くしみ下され、殊に学校の事に関しては、何等の私心もなく全く東京医学専門学校の権化の如く、総てに御熱心に御努力され、吾々の救世主としての其の大恩ある、高橋先生が、今や再び発件を起され御不快のお知らせを受けた私は、何とも言い知れぬ不安の念に襲われ、殊に八十九歳の御高齢の事とて、尚更御憂慮申上げたのであった。

一月十三日（日曜日）

東京の本邸より、お子様が逗子御別邸を訪れ、一家御団欒の後ち午後五時頃、御帰京になるので玄関までお見送りなされ、お室に再びお戻りになるや間も無く、突如として御意識に変調を来され、軈（やが）て言語不明瞭なる事を申されたる由にて、お付の方々は御案じ申上げ、早速私の所までお知らせになったとのことであった。ご自愛に満ちたる先生の御風貌を拝し、今は全く御意識不明にて、昏々としてお眠りに就かれたる御様子と御高齢の事共を思い浮べて正に来らんとする一種異様の恐怖に戦慄いたのであった。

此の様な状態の中に、夜は次第に更け渡り何かと御看護お手当申上げ、御枕頭にて夜の明けるのを待って幾分御気分も落付かれたる様にお見受けしたのであったが、御重態の為め一刻も楽観は許されないので、一と先ず、東京へ御治療の準備やら御容態の報告を兼ねて帰京する事に決心したのである。

一月十四日（月曜日）

此の日早朝五時過ぎの列車で、急ぎ帰京し東京駅より自動車を飛して淀橋病院に駆けつけ直ちに木村婦長に命じて、付添看護婦二名と一切の薬品、機械器具類の必需品を整えしめ、尚出勤時間になれば学校並びに病院の先生方へ御病状を報告する様依頼して、倉沢、早川の両看護婦を伴い、其侭再び逗子へ引返した。再び御病床に戻れば、先生

には依然として、同様の御病状なるも、時折欠伸を繰返され眼頭部の冷湿布も取除かれんとするが如き制動作ありて、折々浅きお眠りに就かせらるるも、午後五時頃より脈拍結滞あり、依然として欠伸を催さる。（中略）

一月十五日（火曜日）

午前より深きお眠りに就かせられたる御様子なるも、脈拍は依然として、時々結滞を生じ、欠伸も前日の如く繰返さる。強心剤、葡萄糖の御注射並びに其他のお手当を申上ぐ。（中略）　斯如にして余等三人は又もや徹宵して御経過を見守ったのである。

一月十六日（水曜日）

午前零時頃より咽頭部に喀痰の分泌貯留ありて呼吸状態お苦しくなられたるも、この排出お手当に依り忽ち回復し三時頃に至り、御発熱も幾分下降し来り脈拍も再び整調にならる。（中略）此日午後三時頃、奥様方御付添中、突然意識回復に向わせられ、約三十分位お語らいあり、御家族初め一同も大いに打ち喜び合えり。其の時、先生には自分を見て御手を取らせられ「学校、学校」と御心配あり気に囁かれた。折から東京より到着の学生総代鈴木校友会委員長、金子副委員長、中屋四年級長等四名御見舞申上げたるに、先生には大いにお喜びの御様子にて殊に是等四名に各々の御握手をなされ、学校の事ども御口ずさみあり。斯る御病床にても常に母校のことを案ぜられ居る先生の御心境に対し学生等一同も感激の涙を以てお別れ申したる此の情景の場面に立ち会いたる自分としては言い知れぬ感に打たれ、徐ろ御心中を拝察して涙無しには居られなかった。（中略）

一月十七日（木曜日）

斯くして御病状は一進一退し意識も明、不明、交々来りたるも、午前、佐藤校長御来訪の時は幾分御意識を回復さられたるが如きにてお話に何やらうなづかせられたり。（中略）

其時、吾等卒業生一同にて、先生へ御見舞として誰れか適当なる先生の御　来診を仰がんとの相談ありて、帝大の稲田龍吉博士に御願い致す様佐々君に一任す。此時友人諸兄には自分の殆んど不眠不休お付添いにて若し健康状態に支障を来すことあれば大切なる時に差支えを生ずる故、交代して休養しては如何かと御同情を寄せるられお薦め下されたるも、自分としては日頃深き御慈愛に浴する先生の一刻も忽せに出来ざる御容態に対し、不充分ながらも御快癒までは出来得る限りの努力を尽し決して御枕頭より倒るるまでは去るまじき決心を以て御看護申上げ居りし事と、且つは御家族の方々並びに竹下先生等の御希望により、折角今まで付添い居り且つ、御病人も平常より希望して居られたことでもある故、是非の侭にて御治療を継続する様お話あり、自分としては誠に感激に堪えず、且つ常日頃先生には「俺の死水は自分が手塩にかけた卒業生に取って貰うのだ……。」と云って居られたお言葉が思い浮かばれて、一人感慨無量、及ばずながらも御付添い申上げる決心を堅めたので、之等の友人方も其の意を諒とせられ、誰か応援治療に当る方を依頼するとのことで帰京せられた。（中略）

一月十八日（金曜日）

昨夕来より今朝まで御容態に大いに心痛したるも依然同様なる御状態にて経過を続け居る為め、自分は主侍医として、御病床に対し面会御遠慮申上げる様玄関先に掲示発表す。本日、京都より中島玉吉先生（高橋琢也の女婿）御来着ありて其の高橋先生生徒監来訪、徹宵御見舞申上ぐ。其他の見舞客ある内に午後五時十分帝大の稲田博士、佐々君と共に御来診ありて御診察の結果吾々と同様脳溢血と診断され且つ左胸部肺炎の憂いありとの事にて治療方針は大差なきも今後の対策に対して御打合せを終り御帰京さる。それより僅か前五時頃淀橋病院より森戸君昨日の話により応援として来訪す。（中略）自分は看護婦に依頼しおき、寸暇を得て初めて森戸君、佐藤、三浦、両君等と共々横になりて寝に就けり。其の間一時頃より古川（道之助）君来り、徹宵応援下され五時頃帰宅さる。

一月十九日（土曜日）

御容態依然として同様なるも、今朝八時頃突然可成り激しき強震あり。別室より親戚の方々も大いに驚き、御家族の方も全部期せずして病室に駆け集り、御異状無きやと御案じ申上げたるも、別に御異状を認めず安堵す。（中略）

午後、藤井教授直宮君を伴い来訪され直宮君は応援治療のため止まる事となれり。当日は貴族院の方々も御見舞として殊に御高齢なる議員原保太郎閣下を初めとし夕刻には望月圭介閣下等等しく御病床を訪わせらる。然るに午後七時頃より

「チェーンストツクス」氏呼吸型始まるに至り全身状態全く絶望に陥らせらる。此の夕刻頃より各新聞記者諸君、交々来訪され、竹下先生其の任に当り応対さる。東京より御令息方々全部御帰邸になり大いに安堵するも、御危篤の状態も全く絶望のため、佐藤君より学校宛ての其の旨通知さる。御親戚の各夫人方も交互に枕頭にて絶えず御気を配られ御看護申上ぐ。古川君も時々暇を見てお立寄りになり、直宮君と三人にて御手当てに従事す。

斯くして時移り御容態も益々悪化し、遂に御家族を初め親戚の方々御一同を御病室に招じ、御一人も残さず御病床を取り巻き憂いの中にも満足の色を漂わせて最後の別れを見守られた。時に午後十時四十分。先生には安らけく楽々として永久の眠りに就かれることとなったので、御看護申上げ居たる吾々一同も只々茫然自失の有様で、諸所に啜泣きの声さえ耳に止どまり、ただ自分等の不行届きの御看護を心から先生にお詫びしてお許しを願うのみであつた。直宮君は時間の都合で十一時過ぎの列車で帰京された。絶望の電報は学校に飛び、明早朝御危篤の儘にて御本邸へ御帰京される事となった。

一月二十日（日曜日）

御病床の間常に御指揮の任に当って居られた高橋常務理事の御指図により午前八時近く東京より佐々君初め外数名の方々に依り差廻しの寝台自動車の到着を待ち、之等の人々と共に自分は看護婦三名を伴い先生の御枕頭に侍し、寝台車を先頭に数台の自動車を連ね東海道をひた走りに帰京を急ぎ、午前十一時同淀橋の御本邸に到着し、門前に堵列せる学校病院職員一同のお迎えを受け御邸に御入り遊ばされた。斯くして午後一時、遂に貴族院議員東京医学専門学校理事長　高橋琢也先生の御霊は永久に逝いて帰えらせられざる悲しき御逝去の報が発せられた。

此の一両日間京都に居られる御親戚の中島玉吉先生、福岡の高橋丑太郎先生御夫妻、高橋常務理事御夫妻、竹下先生御夫妻、其他御親戚の方々御一同並びに学校、病院の方々のお集りに依り、万遺憾なく御配慮、御見舞い、御看護等々にてお家族の方々と共々御心労遊ばされたることに対しては只々感謝に堪えない次第であるが、先生の御逝去に就いては誠に御同情に耐えず謹んで哀悼の意を表する次第である。

私達は先生の思い出す一歳前の此の悲しき思い出の日の切迫する時に当って此の大恩を受けし我が故理事長高橋琢也先生の偉大なる御霊は永久に逝いて再び帰らせられざるも、在りし日の如く吾々の母校、大久保原頭の校舎並びに淀橋の病院を御慈愛を以て永遠に御守り下さることであろう。

私達は先生の教え子として此の偉大なる先生の御業績を穢さず、益々母校を発展させ、益々隆盛に赴かしむることこそ真に先生への御遺志に添うことであって且つ万分の一にもお報いすることとなるであろう。

「終りに臨み、逗子の古川君御夫妻に対し、今回の御援助を衷心より感謝す」

昭和十年晩秋

故高橋琢先生追悼号発刊に際し、謹んで御病状経過を発表す。（主治医　小川　東洋）

家族や小川東洋らが見守る中、高橋琢也は昭和10 年 1 月 19 日に帰らぬ人となった。葬儀は 1 月 23 日に東京医学専門学校の全職員と全学生により営まれ、手厚く葬られた。墓地は豊島区落合霊園内にある。高橋琢也の葬儀の様子や職員、在校生、卒業生の追悼文は東医交友会雑誌 18 巻 1 号[9]、に詳しく載せられてある。高橋琢也と学生達が一心同体となっていたことが良く分かる。東京医科大学は 2016 年に創立 100 周年を迎えるが、その年は高橋琢也没後 81 年目にあたる。

7. おわりに

高橋琢也と学生達は大正 5 年 6 月 2 日に初めて邂逅し、それ以降 20 年にもわたり、一体となって東京医学専門学校の設立と発展に貢献した。この間繰り広げられた人間的な慈愛と信頼に満ちた交流は他に類を見ない。佐藤達次郎らの教職員も一体となってそこに加わっていった。このように長く続いた強い信頼関係の学校史は 20 世紀初頭から中葉における奇跡であるといえよう。高橋琢也の遺志を引き継いだ佐藤達次郎は昭和 18 年まで東京医学専門学校の校長を務めた。東京医学講習所および東京医学専門学校の校長を長期 28 年も務めたことになる。その後佐藤は順天堂医院に戻り、順天堂医学専門学校（現・順天堂大学）を創立することとなった。大正 5 年以来、順天堂医院（とくに順天堂赤坂医院）か

らは多くの臨床医が教授や助教授として東京医学専門学校へ派遣され、東京医学専門学校の基礎作りと発展に貢献した。筆者からみて東京医科大学の「源流二つ」とは、一つは（私立）日本医学専門学校を総退学した学生達、もう一つは東京医学専門学校を応援し実際的に教育に携わった佐藤進、佐藤達次郎、順天堂医院の医師の方々であり、その中心に高橋琢也がいたと思えるのである。読者諸兄のお考えは如何であろうか。

［追記］　本稿「高橋琢也と学生達」(1)-(6) はあくまで高橋琢也と学生達の交流に視点をおいて執筆したものであり、筆者の誤謬や推測も数多く含まれている。東京医科大学の正史は「東京医科大学五十年史」、「東京医科大学七十年史」及び「東京医科大学八十年史」に書かれている通りである。最後に本稿を執筆するにあたり、終始暖かいご鞭撻を戴いた高橋龍二氏（高橋琢也先生の孫、東京医科大学昭和 52 年卒）に深甚の感謝を致します。

文献と人物

1）東京医科大学同窓会（編集：原三郎）本部会記録（復刻版）、1966 年
2）東京医科大学同窓会：東京医科大学五十年史、1971 年
3）東京医学専門学校校友会雑誌（大正 8 年 1 月発行）第 1 号、1919 年
4）本部会：大正 6 年 11 月 1 日に高橋琢也の要請を受けて設立された東京医学講習所に学ぶ学生達の委員会。各学年の代表と旧四年生といわれるストライキ指導者ら（後藤哲雄ら）によって結成された。大正 7 年 4 月 11 日まで委員会は精力的に開催され、とくに高橋琢也との会議は秘密会と称された。大正 7 年 4 月 11 日の東京医学専門学校認可に向けた学生達の委員会であった。その会議録は「本部会記録」として残されている。
5）東京医学専門学校校友会雑誌（大正 9 年 7 月 15 日発行）第 3 号、1920 年
6）東京医科大学維持会：奮闘の半年（復刻版）、1996 年
7）高橋琢也：東京医学専門学校学生に告ぐ。国論 9 号、1919 年
8）東京医科大学：60 年を顧みて。東京医科大学報創立 60 周年記念特別臨時号、1976 年
9）東医校友会雑誌（高橋琢也追悼号、昭和 11 年 1 月 20 日発行）18 巻 1 号、1936 年
10）東京医学専門学校校友会雑誌（大正 8 年 6 月 20 日発行）第 2 号、1919 年
11）小宮豊隆（こみや　とよたか）（1884～1924）福岡県久富村出身。第一高等学校をへて、東京帝国大学文学部独文科を卒業。夏目漱石の知遇を得て、漱石の薫陶を受ける。漱石の小説「三四郎」の主人公であるといわれる。明治 42〈1909〉年、慶應義塾大学文学部講師。大正 5 年に東京医学講習所講師、大正 7 年に東京医学専門学校教授（ドイツ語）。大正 11 年 3 月に東京医学専門学校を辞し、4 月より法政大学教授。大正 12 年 3 月、渡欧。大正 13 年帰国し、東北帝国大学法文学部ドイツ語教授。東京医学専門学校時代は文芸部長を務めた。
12）原　三郎：校歌の由来。東京医科大学報（昭和 52 年 7 月号）第 103 号、1955 年
13）東京医学専門学校雑誌（大正 14 年発行）第 2 号、1925 年
14）日本医科大学 70 周年記念実行委員会：日本医科大学七十周年記念誌（編集：長堀篤二ほか）pp. 80-168、1973 年
15）荒井恒雄：高橋翁追憶。東医校友会雑誌（高橋琢也追悼、昭和 11 年 1 月 20 日発行）18 巻 1 号、1936 年
16）手束平三郎：森のきた道。日本林業技術協会、1989 年
17）長池敏弘：高橋琢也の生涯とその事跡（1)-(3) 31 巻 17-19、24-29、1978 年
18）高橋琢也：高橋琢也日記（大正 5 年～大正 12 年）（東京医科大学・歴史史料室保存）
19）友田燁夫：高橋琢也と学生達（4）中 69 巻 3 号、184-209、2011 年
20）友田燁夫：高橋琢也と学生達（4）下 69 巻 3 号、321-348、2011 年
21）高橋琢也：陸軍飛行演習所感。国論 9 巻 7 号、1921 年
22）大学昇格期成同盟：大正 14 年 11 月に設立された学生と職員による大学昇格を目指す組織である。その当時は学生達は東医昇格期成学生同盟と名付けられた。期成同盟は卒業生や在校生から寄付を集め、大学昇格への基金として貯蓄した。一方職員らは昇格期成会を結成し、会長には高橋琢也が、委員長には白金季男がなっている。
22）土井晩翠（どい　ばんすい）（1871～1952）：仙台出身。仙台の第二高等学校をへて帝国大学英文科を卒業。明治 32〈1899〉年に「天地有情」詩集を刊行し、注目を浴びた。晩翠作の「荒城の月」は滝廉太郎作曲で有名である。明治 34 年に第二高等学校教授となる。大正 13 年には英国のバイロン作「チャイルド・ハロルドの巡礼」を翻訳し、刊行した。昭和時代に入り校歌の依頼を受けることが多くなり、200 にもわたる校歌の作詞を行った。「仙台市名誉市民」称号を受け（昭和 24 年）、文化勲章を授与した（昭和 25 年）。明治 34 年にイギリスに留学しているが、当時ロンドンに留学していた夏目漱石を訪問している。小宮豊隆とは夏目漱石を介して交流があった。とくに、小宮豊隆が大正 13 年に仙台に転職して交渉があったと推測される。

23） 東京医学専門学校雑誌（大正 13 年発行）第 1 号、1924 年
24） 黒川利雄：晩翠先生校歌集、1967 年
25） 晩翠先生記念出版会：生誕百年記念　晩翠先生と夫人　資料と思出、1971 年
26） 高橋琢也：森林杞憂（復刻版）2019 年（東京医科大学図書館所蔵）
27） 高橋琢也：森林杞憂。秀英舎、1888 年
28） 天野郁夫：大学の誕生（上）（下）。中公新書、2004 年
29） 国論（昭和 4 年 11 月号）15 巻、1929 年
30） 根岸賢一郎、丹下　健、鈴木　誠、山本博一：千葉演習林沿革史資料（6）（松野先生記念碑と林学教育事始めの人々）演習林 46 号、57-121、2007 年
31） 高橋琢也：町村林制論。明法堂、1889 年
32） 友田燁夫：高橋琢也と学生達（5）2012 年（印刷中）
33） 東京医科大学図書館（長村重之編）：東京医科大学古医書目録、1982 年